
感染者の沈黙

原案・文章：岡田健八郎 キャラクターアイディア：岡田健八郎の兄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

感染者の沈黙

【Zコード】

N1037X

【作者名】

原案・文章：岡田健八郎 キャラクター：アイディア・岡田健八郎
の兄

【あらすじ】

あれから半年後。

今度は街が汚染される。

狂暴化した生徒達による無差別殺人【大羽中学校封鎖事件】

事件の事実は隠蔽され、人々は真実を知ることは無かつた。

事件の生存者達は東京で新たな生活を始めていた。だが、事件の元

凶くDEMONYO

・ウイルスによる脅威は終わっていなかつた。突如封鎖される東

京。武装する自衛隊。東京内でウイルスによる新たな<感染>が始
まった。さらに、闇に潜む謎の生命体の影も忍び寄っていた。あの
事件の恐怖は、始まりに過ぎなかつた
すべてが前作を超えた！

脅迫と衝撃が増殖するサバイバル・アクション第2弾

大澤博士は静かに待合室に入り、内閣総理大臣と相沢陸将の後ろにたたずんだ。2人とも、研究室を見下ろす大きな窓の前にはりつくようにして立っていた。

「彼女は何だ?」総理が尋ねる。

「フランス人だとは聞いたが」陸将が答える。「くそ、彼らが邪魔でよく見えないな」

「何をしてるか見えるか?」

「心配いりませんわ、総理」大澤博士は甘い声でなめらかに言った。総理がびくっと身体を痙攣させ、振り向いた。

「君か!驚いたよ、博士」白髪交じりの総理は言った。大澤はいつも思うのだが、この総理は報道陣のカメラの前に立っているとき以外はとても神経質に見える。1国の総理大臣が女の私に驚くなんて皮肉だわ。彼女は笑みを隠し、2人の前へ立った。

「申し訳ございません総理。私が居ることに気づいているかと」総理は笑いをあげた。「こんな薬品だけの研究所のせいかもな。私は少々薬品恐怖症気味でね」

相沢陸将が言った。「いつでも新鮮な空気が吸えますよ」あら、この陸将も驚かされたことに機嫌を損ねているわ。大澤はそう思った。

「それよりも彼女は何だね?」総理は尋ねた。

「今回の封鎖事件の出来事は覚えていますか?」

総理は思い出したくない過去をむしり返されたような口調で言った。

「ああ。未知のウイルスが学校内に流行しことだろ?国民には公表してないが」

総理は陸将を向いた。

「そういえば、あの封鎖に関わった者の処罰はどうした?」

陸将は冷静な声で言った。「たいして重い処罰はしてません。矢も得ない状況だったので」

総理は大澤に向き返した。

「それで、その封鎖事件と彼女の関係は？」

大澤はからかう田で総理を見つめた。

「彼女の血液中や唾液中にウイルスが検出されました」総理は驚いた。

「感染しているのか？」

「ええ。でもどういうわけか彼女は免疫を持つていて発症はしません」

総理は窓から女性を見た。

「まだ中学生だな。彼女は免疫を持つてゐるのだろう？なら早く家族の元へ返してやらないのか？」

大澤は総理の無知さに驚いた。

「確かに免疫は持つてます。しかしそれは発症させてないだけで、彼女は非感染者ではなく保菌者です」

陸将は聞き返した。「保菌者？」

「そうですね。彼女の唾液やか血液を他者が触れたりしてしまったら、その人はウイルスに感染します」

総理は同情の目で少女を見た。「つまりウイルスの運び屋か」

「彼女を元に何をしているのだ？」陸将は訪ねた。

「彼女の血液を元にワクチンの開発を試みています」

総理は大澤に向いた。「成功するのか？彼女を永遠にこの研究所に閉じ込めておくわけには行かない。開発は早くしてくれ」

「大丈夫ですわ総理。近年の医学はかなりの発展を遂げてます」

陸将は総理に尋ねた。「総理。あのく作戦は承認していただましたか？」

総理は陸将から田をそらした。「ああ、国会で正式に承認した。建設も早く取り掛かるだろう」

「思つたより早かつたですわね」大澤は驚いた声で言った。
「国会も大流行パンデミックを恐れてるのだろう」陸将はそう言った。

総理は大澤に向いた。「彼女の細胞サンプルを採取して家に帰すこ

とはできるか?」

「可能ですわ」

「なりそうしてやれ」

総理は窓から少女を見つめた。「できれば、あの作戦が発動されないことを願つ

転人生（前書き）

【前作の登場人物】

相沢信一

大羽中学校学校封鎖事件の数少ない生存者。あの出来事がトラウマになつており、毎日悪夢にうなされている

相沢信也

信一の父親。陸上自衛隊に入隊しており、階級は陸将。前作では名前のみの登場

相沢茜

信一の妹で信也の娘。重い病気を患い、入院中。

相沢信一

信一と茜の兄で信也の息子。S A Tの狙撃手。

【新たな登場人物】

安藤真人

転入した信一の始めての友人。友情は大切にする人物。陸上部所属。結構異性から人気ある。イケメンで運動神経抜群。一人称は俺

梶尾聖夜

大柄の肉体派男子。成績はそれなりに良い。部活はサッカー部。クリスマスに生まれたため「聖夜」と名づけられる。普段は常に不機嫌。猫アレルギー一人称は俺。

坂本真希

はちやめちゃ生徒会長で眼鏡をかけた女子。信一に興味を示す。

帰宅部だが、相当なタフで学校内では人気がある美女。猫好きで口癖は「ニヤー」一人称は私。

実は空手を習つており、黒帯。常に上機嫌。

波川五右衛門

剣道部所属の男子。相当な実力者で町内大会を何度も優勝。物静かで堂々な性格のため、周囲からは現在に生きる侍と呼ばれる。口癖は「油断は死を招くぞ」一人称は拙者。

佐々木奈々子（ささきななこ）

剣道部所属の女子。ポニー・テールのロングヘアで美女だが、五右衛門に匹敵する実力者。口癖は「隙だらけだぞ」一人称は私。

吉川裕也

落ちこぼれで、冴えない男子。友人も少なくいつもクラスでは孤立する。部活は美術部だが、美術は苦手。一人称は僕。

黒澤真斗

左右不对称のツインテールをした美少女。無口で性格は純粋で嫉妬しない。滅多に笑顔を見せないため、彼女の笑顔はレアと言われている。帰宅部だが剣道、柔道、空手の達人。一人称は私。

武田松江

渋い男子。自分のことを大佐と呼ばせる。柔道を習つていて。一人称は俺

尾田向田

ゾンビオタク。赤いコンタクトレンズを持つている。一人称は僕。

綾瀬マユ

あやせ
綾瀬マユ

学校内ではアイドル的存在の優等生女子。男子からは人気、女子から妬まれている。なぜか信一を気に入つた。一人称は私。

ジャン・ヤ・トリエン

ベトナム人の優等生。傲慢な性格。一人称は俺様。

蛇谷古代

元自衛隊の教師。基本的に面倒見が良く、声も渋いため生徒から人気がある。担当教科は社会。安藤達の担任。一人称は俺。

石川紀子

広報委員。信一を【大羽中学校封鎖事件】の生存者だと睨み、インタビューする。一人称は私。

小島香美

金持ちのお嬢様つ子。プライドが高い。一人称は私

転人生

3年1組の安藤真人はいつも通り、教室の窓側の席に座っていた。
「今日も平和だね～」 そう呟いた。

「隙だらけだぞ」 何者かがそう言って真人の右肩を竹刀で叩いた。

「いってえよ！奈々子！」 佐々木奈々子が竹刀を肩に担ぎ、真人を睨んでいた。

「平和ボケしてるなよ。人間はいつどこで死ぬか判らないからな」
平和ボケって・・・戦争が無いからすりやあ平和ボケするよ。おかしな女だな。

「五右衛門！この女子に一言言つてくれ！」 真人は、自分の2個後ろに座る波川五右衛門に助けを求めた。五右衛門は真人を見つめた。
「油断は死を招くぞ」

「五右衛門まで・・・」 真人は絶望した。

「今なら間に合う。剣道部に入れ」 奈々子はそうアドバイスした。
「無理だね。もう陸上部に入ってる。陸上部が廃部しない限り、俺は陸上部をやめない」

真人は隣に座る坂本真希に助けを求めるようとした。「生徒会長様。お願いです、この女子に正義の裁きを」

真希は、眼鏡をかけ直した。「楽しそうじゃない 別に、私が制裁する必要ないじゃん」

この生徒会長はいつも上機嫌でテキトーすぎる。真人はそう思った。

「武田！お前ならわかつてくれるだろ？」

武田松江は不機嫌そうに咳払いする。「大佐と呼べ」

「大佐！頼みます！」 真人はそう言った。

「女性に暴力は振るわない。俺のポシリーズだ」 畜生！真人は心の中で叫んだ。

スライドドアが開き、黒澤真斗が入ってきた。真佐江の席は真人の斜め後ろだった。

「おはよう！」と真人が言つた、「……おはよつ……」と真斗が小声で返した。

相変わらず無口だな。真人はそう思った。

「ああ！もうマジありえねーしーあいつ後でぶつ飛ばす！」梶尾聖夜が不機嫌そうに真人の後ろに座つた。

「どうしましたか？」

「稻葉と坂本が俺のことをバイオレンスパパつて言いやがつた！」と不機嫌そうに言つた。

「私、言つてニヤいよ？」と真希さかせどりゅうせいが言つた。

「お前じゃない。2組の坂本流星さかせどりゅうせいだ」と聖夜は答えた。

「それと「ニヤー」はやめてくれ。俺猫嫌いなんだ！」

「ニヤんて事を言つニヤー猫可愛いのに！」

「俺は猫嫌いなんだ！」

「ニヤー」

聖夜は指と首を鳴らした。「てめー、マジで殺すぞ」

「望むところよ」真希は眼鏡をかけ直した。

真人は、真希の背後から虎、聖夜の背後から龍が現れたように見えた。「幻覚か？」

スライドドアが開き、石川紀子が入ってきた。

「朗報！朗報！」紀子は大きな声で言つた。

「新種ゲーム機が販売するのか？」ジュン・ヤ・トリエンが面白半分で冗談を言つた。

紀子はむかつとした。「違うわよ！」

「じゃあ何だ？」聖夜は不機嫌そうに言つた。

「転人生が來るのよ」そう言つた瞬間、クラスメート全員紀子を見た。

「マジで！」と男子が聞いた。

「男？女？」とトリエンが聞いた。

「男だよ」と紀子が言つた。

「男か・・・イケメンかな」と真希は言った。

その瞬間、チャイムが鳴った。「皆、席に座りなよ」と真希は言った。

真人は、転入生が気になった。今年初めての転入生だな。愛想いいかな？

担任の蛇谷古代が入ってきた。渋い声で真人達に言った。「今日は新しい仲間が来るぞ」

スライドドアが開く。

1人の少年が入ってきて、黒板の前に立つた。

「相沢信一です。神奈川から越してきました。これからよろしくお願いします」

真人は転入生を見た。イケメンだな・・・近くの女子達の囁き声が聞こえた。

「結構イケメンじゃん」

「頭良さそうね」

「超、私好みじゃん」

「思いつきりアタックしようかな」

「無理無理。あなたじゃ無理」

女子共が騒ぎ出した。だから女は面倒だ・・・つてどつかの男子が言いそうだな。真人はそう思つた。

「信一君の席は・・・じゃあ窓側の一番前に座つてもらおう。男子達、下がれ」

窓側の男子達は席を下がった。蛇谷は、新しい席を窓側の一番前に置いた。信一はそこに座つた。

それにもしても、神奈川から東京まで引っ越すなんて、ご苦労なことだ。真人は1個ずれたことで、隣が真斗になり、斜め後ろが紀子になつた。真希が信一に話しかけた。

「君、ちょっとテンション低いね」

「そ、ですか?」信一はそう答えた。

「前の学校で何があつた?」

信一は少し黙つた。真希にとつてこの沈黙こそが答えた。

「ごめん・・・答えなくていいよ。私が悪かった」

信一は真希を見た。「別にあなたは悪くない。前の学校でトラウマ

級の出来事があつてね」

「トラウマか・・・ごめんね。振り返りたくない過去があるんだね」

「・・・はい」

紀子は真人に話しかけた。

「ねえ、あの転校生怪しくない?」紀子は小声でそう言つた。

「そうか?」

「絶対怪しい」

真人は呆れた。「怪しいなら、お前の意見を聞かせろ」

「く大羽中学校封鎖事件」を覚えてる?」そう紀子は質問した。

真人は覚えていた。大羽中学校封鎖事件は、警察特殊部隊によつて中学校が封鎖され、自衛隊が校内に突入、大勢の生徒を射殺した事件だ。警察や自衛隊からの公表は無く、生存者も数名しか居ない。前代未聞のこの事件で一時期ウイルス流行説までできたが、真実は今だ不明だ。

「でも、事件から半年以上立つたぞ。生存者はとつぐに社会復帰してるだろ?」

「でも、あの事件で精神がおかしくなつて、精神病院で治療してたかも」

真人はため息をついた。「だつたらどうする

「決まつてるじゃない」紀子はウインクした。「取材するのよ。眞実を突き止めるの」

再びスライドドアが開いた。

赤い瞳をした生徒が入ってきた。真人はまたかとばかりに呆れ、信二を見た。

真人は信二の反応に驚いた。

信一は赤い瞳をした生徒に恐怖を感じていた。「まさか・・・!」

小声で信一はそう言った。

「尾田。コンタクトはずせ」

「へへい」

尾田匂田は赤いコンタクトをはずした。信一はそれを見て安心した。

真人は紀子に話しかけた。

「あの転入生の反応みたか?」

「ええ。絶対何があるわよ。私たちが知らない秘密が」

紀子は興奮した。

「これは大スクープ間違いなし。謎の転入生の正体は?」

1時間目の数学が終わった。

紀子は信一の席へと向かった。信一は紀子を見た。眼鏡にカメラに手帳、いかにも取材陣らしい。そう信一は思った。

「どうも。クラスメートの石川紀子です」紀子は信一を握手した。
「ど、どうも・・・相沢信一です」

紀子は、胸にあるポケットから何かを取り出した。小型録音機だつた。

「信一君、2、3質問します。まず、あなたの前に居た学校は?」
信一は首を横に振った。「すいません。それは言えません」

「では、転校理由は?」

「家庭内事情です」

「どんな事情ですか?」

「それは、秘密です」

紀子は单刀直入に聞くことにした。

「あなたは、大羽中学校封鎖事件の生還者ですか?」

信一は一瞬黙り込んだが、すぐに答えた。「いいえ

「本当に?」

信一はため息をついた。「あなたは、あの事件の事実を知りたいのですか?」

「はつきり言えば、そうですね」

「なら、インターネットで、感染者の牙を検索するといい

紀子は、聞き返した。「感染者の牙?」

「大羽中学生が投稿した封鎖事件の真実ですよ」

紀子は録音機を止めた。「ありがとうございます」

「で?収穫は?」真人は呆れ声で言った。

「感染者の牙をネット検索しろ・・・だつてさ」

真人は渋い顔した。「感染者の牙?帰つて検索するか」「紀子は真人に笑顔を見せた。「別に、今でも検索できるわよ」

第1技術室

第1技術室は、いわばパソコンルームだ。

「ごめんね、真希ちゃん。いろいろコネを使つてもらつて」紀子はそう言った。

「別にいいよ。私もちょっと気になるし」真希は愛想の良い声で答えた。

「ほんとに、お世話になるわ~」

技術室には、真人、紀子、真希、真斗、聖夜、トリエンが居た。

「何でお前らも居るの?」真人はそう聞いた。

「だつて、気になるもん」全員、そう答えた。

紀子はパソコンの電源をつけ、インターネットを開いた。

「えつと、感染者の牙つと」紀子は検索した。

「あつたあつた」

紀子はクリックした。

聖夜は画面を見た。「どうやらネット小説らしい」

「題名が感染者の牙で、あらすじは、この物語は真実です。大羽中

学校封鎖の真実を書きます。作者、和真・・・鳥円!」

全員、トリエンを見た。「違うよ!俺じゃないよ!俺ベトナム人!」

「分かつてるわよ。それよりも小説を読もう」

全員、小説を読み始めた。

数分後

「」、「これつて・・・」と紀子。

「明らかに・・・」と真人。

「いや絶対に・・・」と聖夜。

「フィクションだ」ヤ」と真希。

真希を除いて、全員失望のムードになつた。

「トリエンーてめー、ふざけたこと投稿するな！」聖夜はトリエンを殴った。

「違うよ！俺じゃないよ！俺はネット小説なんか書かないよ！」
「とにかく、教室に戻りましょ。時間の無駄だつたわ」紀子はそう言つた。

「そりかなー？私は結構、面白かつたけど

全員、技術室を出て、教室へと戻つた。

「やっぱり本人から聞くのが一番ね」紀子は言つた。
「でも、本人は否定してるぜ？」真人はそう答えた。

「分かつてないわねー。嘘ついてるのよ

「嘘？」

「そう・・・私は彼に、あの事件の生還者か？って聞いたの。違うなら普通即答なんだけど、彼は一瞬黙り込んだのよ

「ああ！なるほど！」

「だから彼は絶対、あの事件の生還者で、事実を知っているはず」
「でもどうやって？」

紀子はウインクした。「簡単よ！彼の友人になるのよ

「友人？」

「そう・・・彼と友人になり、友情を深めていくて、親しい仲になるの」

「なつてどうする？」

「分かつてないわねー。親友だから打ち明けられる秘密もあるもんでしょう？」

真人は目を丸くした。「じゃあ、あいつと親友になつて、あの事件の真実を語らせようど？」

「そういう事」

「でも親友なんて、そりそりなれるもんじゃないぜ」

「そこで、あなた出番よ」

「お、俺！？」

「だつてあなたは友情を大切にする人じやない」「でも、相手はまだ得体も知れない人物だぜ」

「そこを何とかしなさいよ」

「んな無茶な」

「お願い・・・ふふふ」

真人はため息をついた。面倒な事になつてきただ。

信一は、社会の歴史の教科書を忘れたことに気づいた。隣に座る真希に頼み込んだ。

「お願いします。教科書を見せてください」

真希は笑顔で答えた。「うん！いいよ」そう言つて自分の席を信一にくつつけた。

「ありがとうございます！」

「お礼はいいよ。私は坂本真希。以後よろしく」

「こちらこそ、以後よろしくお願ひします、坂本さん」

「敬語は使わなくていいよ。堅苦しいから。それに私のことは真希つて呼んでね」

信一は真希の人柄を気に入つた。この人とならうまくいきそう・・・。そう思つた。

取材計画（前書き）

【追加登場団体】

狐狩り

東京都渋谷で拡大中の不良集団。 番長と6人の幹部は信一達の通う中学校に居る。

【追加登場人物】

液田井蛇尾

狐狩りの番長。 自分を総督や總統、あるいは首謀者と呼ばせる。 格闘技の達人。 一人称は俺様、あるいは我輩。

雜賀輝夫

狐狩り幹部。 読唇術の達人で奇想天外なトリックを見せる。 催眠術も得意。 一人称は俺。 ガスマスクをしている。

須田恵子

天才和弓手。 和弓だけでなく、長弓、短弓、クロスボウをも得意とする。 一人称はあたし。

蛸田宗助

情報収集の達人。 液田井の右腕。 一人称は私。

鳥山恭介

巨漢。 鳥を飼いならしている。 丸太を軽々と振り回す力がある。 一人称は俺。

猫野良太

自称射撃と拷問の天才。 実は本物の回転拳銃^{リボルバー}を持っている。 液田井

の左腕。一人称は私。季節問わず常にトレンチコートを着ている。

大山萌

おおやまもえ

狐狩り新人幹部の女子。詐欺と掏りの達人。一人称は私。

今日も晴れている。俺 すなわち東京都渋谷区第9新中学校に通う安藤真人は非常に悩んでいる。昨日転入してきた少年相沢信一と、どうやって親友になるか・・・非常に難題だ。なぜ親友になりたいか?理由は簡単だ。クラスメートの広報委員会の石川紀子に頼まれたからだ。もし断れば、俺の弱み すなわち秘密が大暴露される。それだけは避けなくては!

「おはよう

俺はいつも通り挨拶しながら教室へ入った。獲物(信一)はまだ登校していなかつた。俺に気づいた友人達は俺に挨拶した。

「信一君、ちょっと来て」紀子は俺の腕を引っ張りながら教室を出て、廊下へ連れて行つた。

「で、何か方法を考えた?」

「いや、まだ親友になる方法は考えていない

「それじゃない

「へ?

「親友作戦は時間がかなり掛かる。他に効率のいい作戦考えた?」

「もし他の作戦考えたら親友作戦は凍結か?」

「いいえ、継続よ。あなたは親友作戦で情報収集して。私は他の作戦で情報収集する」

そういうことか。1つの作戦で時間をかけるより、2つの作戦で時間を作った方が効率が良い。

「了解

「あなたはなるべく他の作戦を考えて。私も考える。じゃ、解散」他の作戦か・・・またまた難題だ。ただでさえ親友作戦で頭が痛くなりそうなのに、その上他の作戦を考えろ?俺の頭が火山になるよ。

「うーん・・・俺はついつい声を出してしまった。

「どうしたニヤ?」真希が話しかけてきた。

「いや、なんでもない」

生徒会長の坂本真希は常に上機嫌。語尾に「一ヤー」が付けばさうじて上機嫌。そして語尾に「一ヤー」と「が付けば最高上機嫌だ。

「今日は上上機嫌ですね」

「一ヤー」

おっと、生徒会長を相手にしないで作戦を考えなくちゃ。チヤイムが鳴る。

「1時間目が始まるぞ」

「分かつてる」

1時間目は社会だったな。しまった！今日から歴史だった！しかし安藤はひらめいた。

待てよ？ここで俺の前に座つてる信一から教科書を見せてもらえば、それがきつかけで友情が芽生えるかも！ふふふ・・・我ながら良いプランだ。

「…………どうしたの？…………一ヤー一ヤーして…………？」

？」真斗が話しかけた。

しまった！無意識で笑つちました。

「い、いや～教科書を忘れて、やけくそになつてるのぞ」

「そうには…………見えない…………」

「そうか」

「教科書…………見せてあげる…………へ？」

真斗は机を安藤に寄せた。

「い、いよいよ！女子に見せられるの恥ずいし」

「遠慮しないで…………」

計算外だ！一ヤー一ヤーしなければ良かつた！

そういうしてじるうちに1時間目が終わつた。俺の計画も終わつた。

紀子は真人の机に来た。「で、何か思いついた？」

「いや、まだだ」

「実は提案があるんだけど」

提案？一体何を思いついたんだ？「書いてみろ」

「く狐狩りに力を借りない？」

「狐狩りだつて！？」

狐狩りは今渋谷でPTAや警察から問題視されている不良集団だ。暴行はもちろん、掏り、かつ上げ、

万引き、麻薬売買、盗品など、もはやヤクザレベルまでの犯罪に手を染めている。この集団は、他の不良集団を吸収して拡大している。この学校にも幹部6人と狐狩りの總統が通つてきている。

「駄目だ！危険すぎる！」

「でも、向こうには情報収集のプロが居るでしょう？」

「蛸田だな？でも向こうは犯罪組織だぞ！中学生ヤクザだぞ！マフ

イアだぞ！軍隊だぞ！」

軍隊は大げさだと思われるが、狐狩りの入団者数は相当なものだと聞く。

「でも金さえ払えば何とかしてくれるかも？」

「傭兵じゃないんだぞ！」

紀子はため息ついた。「OK。じゃあ、あなたが明日までに何か作戦を考えてくれればやめる！」

「おお！考えるとも！」

この日、何も思いつかなかつた。

頭の中で目覚ましが鳴り響いたとき、真人はフランスのヌーベル美術館で美人のフランス人と一緒に楽しみながらレオナルド・ダ・ヴィンチの【モナ・リザ】を鑑賞している夢を見ていた。

彼はぱつとはね起き、目覚ましを止めた。そして時刻を見た。

「午前8時12分・・・まずい！遅刻する！」

真人は急いで制服に着替えた。顔を洗い、歯を磨き、駆け足で食卓に向かった。

「真人、朝ごはんは食パンと目玉焼きだから」真人の母は食器を洗いながら言った。

「時間が無いから今日は食べない！」真人の左頬に何か掠つた。包丁だつた。母が包丁を投げた。「食べなさい・・・」

「は・・・はい」その答えに母は満足したのか、とびつきりの笑顔を見せた。

2階から誰かが降りてきた。「やばい！遅刻する！」

真人の姉の真佐子まさこが来た。

真佐子は目玉焼きを食パンに乗っけてそれを持って、玄関へ向かった。

「じゃあ行つて来ます！」朝食を食べながら高校へ向かった。真人も食べながら登校することにした。

登校中真人は考え事をしていた。

「何か大切なことを忘れている気がする・・・」

思い出した瞬間、口に銜えていた食パンを落とした。

「取材作戦・・・考えるの忘れてた」

このままじゃ狐狩りに力を借りる事になつてしまつ。気が重い中、彼は登校した。

案の定、紀子は真人を待ち構えていた。

「真人君～何か考えた？」

「何も・・・」

「じゃあ、狐狩りの出番ね。第1校長室へ行きましょ～」

「2人で？」

「護衛は雇つてるわよ」

「護衛？」

紀子の後ろに、五右衛門、奈々子、聖夜、真希、真斗、トリエンが居た。

「何でお前らが？」

「拙者らの・・・」

「弱みを・・・」

「握られちまつて・・・」

「・・・断れ・・・」

「無いんだ・・・」

「ニヤー」

そういうことですか・・・

真人と紀子と護衛たちは第1校長室に向かつた。

「ねえ、やめようよ」トリエンはそう提案した。

「なぜ？」

「だつて、職員達が恐れて乗つ取られた校長室を手放して第2校長室を建設するくらいの大物集団なんだよ？交渉がうまくいくわけがない」

「諦めてもいいけど、あなたの秘密を大暴露しようかな？」

トリエンは何か言いたかつたがやめた。

第1校長室に着いた。扉に異様なオーラを感じられた。扉には狐のシルエットがプリントされた旗が貼り付けられていた。紀子はノックをして扉を開けようとした。室内から凄まじい殺意が感じられた。紀子は唾を飲んで扉を開けた。

中に広がっていた光景は・・・！！

2人の男女が将棋をしていた。態度から見て男子が優勢だった。男子はガスマスクをしていた。

「うーーん」女子はうなり声を上げていた。

「降参か？」

「まだだ！これでどうだ！」女子は角行を動かした。

「次で王手だ！」

ガスマスクをした男子は飛車を動かした。

「王手」

「ちょっと待て！？」

「将棋に待ては無しだ」

「ぐぐぐ・・・！」

女子はどこを動かしても王将を取られてしまつ。「こ、降参だ！」

「じゃあ、今日の夕食はお前のせいだ」

「ボス、お客様だよ」

「入れる」

真人達は校長室内に入れられた。

ボスと呼ばれる男は、校長席に堂々と座っていた。金髪のオールバツク型の髪型をし、サングラスをかけた多少大柄の男だ。

「何のようだ？」ボスはいかにも悪役っぽい声で言った。

紀子はボスの存在感にも動じずに言った。「まず自己紹介をして

「雑賀輝夫。札幌出身で超能力者だ」ガスマスクの男は呼吸音混じりの声で言った。

「ちなみにガスマスクは沖縄のアメリカ屋で買った」

「町内で最も腕のいい和弓手の須田恵子。どんな弓も扱える」女子

は言った。素晴らしい肢体を持った長身の女子で、体にぴったりした制服は、深い谷間が除くほど大胆に、胸元が開いていた。スタイルなら真希は負けていない。この女子も巨乳のようだが、こちらは真希が若干勝っているな。

「私は新宿出身の蛸田宗助です。情報網なら私の得意分野です」この男はネクタイをつけて身だしなみもしっかりとしている。顔はまあまだな。「ちなみに私は英語とロシア語とフイリピン語が得意です」

「巨漢のシャーマン鳥山恭介。黒魔術を勉強している。皆からは鋼の獣^{ヒースト}と呼ばれている」

慎重は一メートル近くある大男だった。スキンヘッドだ。

「最後は私は猫田良太。尋問の専門家、銃の腕もたつ。大阪出身だ。ここでの生活に慣れちまって大阪弁が言えなくなつた」夏なのにトレンチコートを着て、黒い手袋をしていた。

「夏なのにトレンチコート?」紀子は聞いた。

「トレンチではない。ダスターコートだ」

この男は長身のダスターを着て、長いブロンドの髪、中学生なのに頬鬚と長い口髭を生やしている。

「その髭は本物?」

「もちろん。発毛剤を長年使用していた。西部劇に憧れている」

「そして俺が狐狩り総督の液田井蛇尾だ。総督、總統、首謀者、あるいは総司令官と呼んでくれ」

ここで真人は悟つた。幹部は全員サイヤ人の集団だ。

「妙な事は考えるな」蛇尾・・・ではなく総督は言った。

「ここに居る幹部全員、元番長だ」

向こうは総督を合わせて6人。真人達は8人。数では真人達が勝つていた。

「私達は交渉に来たの」

「交渉の前にお前たちも自己紹介しろ」猫田がそう言つた。

「じゅ、ジ Yun・ヤ・トリエンです。ベトナム人です」

「俺は梶尾聖夜。サッカー部」

「拙者は波川五右衛門。剣道部」

「私は佐々木奈々子。同じく剣道部」

「私は坂本真希。生徒会長で帰宅部」

「私は．．．黒崎真斗．．．帰宅部」

「私は石川紀子。広報委員会」

真人も自己紹介しようと喋りかけたが、紀子が喋りだした。「彼は

安藤真人。私の相棒で陸上部」

「広報委員会が何のようだ？まさか取材か？」

「違うわよ。あなた達を堂々取材する広報委員会が何処にいますか？」

猫田は総督に向いた。「総督、あれは嘘です！拷問しましょ！拷問許可を！」

「落ち着け。雑賀。どうだ？」

「彼女は嘘を言ってませんね」

「よく分かるわね」

「雑賀は読唇術と催眠術の達人だ。幼稚園の頃から修行してたらしい」

「広報委員の石川以外は全員彼女の護衛だ」雑賀は見事当てた。

鳥山は笑つた。「はつはつは！面白い護衛だ。どう思う猫田？」

「くくく！面白い！ベトナム人は鬼畜な兵士だ？サッカー部は足技に自信があるかな？剣道部2人は侍かな？帰宅部2人は楽勝だな。陸上部は逃げ足がいいかな？」

「悔つてはいけない。剣道部2人はかなりの実力者です」「本當か？蛸田？」

「間違えありません。特に男の方は町内大会、および県大会で何度も優勝しています」「で、護衛をつれて何のようだ？」

「あなた達の力が借りたいの」「我輩たちの？」

「ええ。もちろんタダとは言わない」

「はつはつは！俺達を傭兵か何かと勘違いしているのか？」「くくく・・・面白い女だ。どう痛めつけようか？」

紀子は写真を出した。相沢信一の写真だ。「彼は【大羽中学校封鎖事件】の生存者かもしれない。私はあの事件の真相が知りたいの」総督は信一の写真をじっと見つめている。

「はつはつは！くだらん。引き受けるとでも？」「くくく・・・馬鹿な女だ。どう痛めつけようか？」

紀子はため息をついた。「もし、あの事件の真実を知つたら、マスクミに売りつけられるわよ？」ユース番組に出れるかもよ？有名になれるかもよ？」

「はつはつは！俺達はすでに東京中で有名さ」

「くくく・・・アホな女だ」

総督は写真を返した。「悪いがあきらめてくれ」

真希は紀子の肩を叩いた。「仕方ないよ。あきらめて帰るニヤー」「校長室室内が静かになつた。

「ニヤー・・・ニヤーだと？」

総督を除く全ての男子の口が一斉に開いた。「『『『萌え～！』』』

「

真人は耳を疑つた。は？萌え？

「生徒会長様！どうかこれを！」 雜賀は猫耳を渡した。

「付けてください！」

真希は猫耳を付けた。

「「「「さうに萌え！」」「」」

「う、美しい・・・・！」

「私の情報網でもこんなに可愛い女子は見つからなかつた！」

「はつはつは！我らがアイドルが生まれた」

「くくく・・・素晴らしい！」

真人は呆れた。「アイドルなら、綾瀬マユが居るだろ？」

「あいつでは

「どうも」

「しつくり」

「来ない」

男子全員真希を見た。

「だが、彼女は眼鏡キャラだし」

「ツインテールだが、首くらいの長さで、俺達好みの長さと髪型だし」

「スタイル良いし」

「巨乳だし、声可愛いし」

真人は呆れた。こいつらはオタクか・・・

須田は怒り出した。

「お前ら変態か！ボス、何か言ってください！」

「・・・萌え・・・」

「そうでしょ！ボス！」

「ここは一先ず！」

「引き受けましょう！総督」

「はつはつは！賛成だ！」

と言つわけで交渉が成立した。真希のおかげで。

「真希を連れて正解だつたわね」紀子は上機嫌だ。

「まさかオタクだつたとは」聖夜は珍しく面白いものを見た顔をしている。

「よく分からぬ連中だ」五右衛門も驚いている。

「びっくりしたわ」奈々子も驚いている。

「．．．世の中不思議．．．」真斗も驚いていた。

「ニヤー」真希は超上機嫌だった。いまだに猫耳を付けている。

狐狩り（後書き）

余談

放課後

「俺の名は、メガトロンだ！」 総督はそう叫んだ。
「総督、やはりメガトロンではしつくりきませんね」

「ここでリクエストを聞こう」

「クライシス！」

「ボス！」

「魔王！」

「大魔神！」

「よし！俺は大魔神王クライシスボス！」

「「「「かっこいい！」」」

「お前ら何やつてんの？」

「暗号名を作つている」

「俺の名は究極の超能力者、アイススクリーム 雜賀輝夫」

「私は最高の情報屋、サイドウェーブ 蜷田宗助」

「俺は巨漢のシャーマン、アイアンビー 鳥山恭介」

「私は射撃と拷問の天才処刑人、ダブルフェイス 猫田良太」

「そして！俺様は、最強、最凶、最狂、大魔神王、スカイライン 液田井蛇尾」

「須田、お前のも考えた」

「「「「お前は20世紀最強の征服者、スカイライ須田恵子！」」」

「・・・幼稚・・・ダサい・・・本当に中学生？」

信一の視点

富士山の遙か頂上から、同年齢のフランス人が笑いながら呼びかけている。「信一君、早くして！まったく、男子が女子より体力が無いいつてどういこと？」その笑みは天使だ。

登りつめようとするが、両脚が重かつた。「待ってくれ。頼むよ……」

のぼるうちに、辺りが暗くなっている。早く追いつかなくては。ところが、フランス人に追いつくと、フランス人は赤目で信一を見つめていた。鋭い鮫のような歯を信一に向け、恐ろしい叫び声を上げながら、信一の首筋を噛み付いた。

信一は悪夢からはっと目を覚ました。ちゃんと自室のベッドで寝ている。安心して再び眠りに付こうとベッドに寝転んだが、隣に赤目のフランス人が信一を見つめていた。

再び信一はははっと悪夢から目を覚ました。自分の左頬を抓る。紛れも無い、現実の痛みが感じられた。痛みは本来好きではないが、この痛みは特別好きだ。夢か現実か分かるからだ。

信一は冷房が効いた部屋で寝ていたはずなのに、汗を大量に搔いていた。

「はあ……はあ……今度こそ現実だな……」

自室を出て1階の台所へ行き、冷蔵庫から牛乳を取つて飲んだ。

「あの事件から半年以上するのに、なぜこう毎日悪夢を見るんだ？」また悪夢を見るかもしれない。何か楽しいものが見たい。信一は自室へ戻り、B.Dで何か面白いものを探した。

「トムとジョリー……これにしよう

再生機の中にいれ、ディスクを再生した。

見始めてから数分後、何者かが玄関を叩いた。信一は悪態つきな

がら、玄関に向かった。

「どなたですか？」

返事は無かつたが、まだドアを叩いている。

「あの、どなたですか？」

返事は無いがまだ叩いている。

「いい加減にしてください！」

ドアを開けて、来訪者の顔を見た。そこには兄、信一が立っていた。赤目だった。

「はっ！」信一はBDを見ながらいつの間にか寝ていた。

「また悪夢か……」

時計を見た。時刻は午前5時46分。もう寝るのはやめることにした。

信一は顔を洗って、歯を磨いた。パジャマを脱ぎ、制服に着替えて、朝食を作った。

「今日は田玉焼きにしよう」

炊飯器が炊き上がりの音を発した。炊飯器から炊き上がった米をして、2段弁当の1段目に隙間無く入れた。「おかげは冷凍でいいや

弁当を完成させ、朝食を食べた。

家中のコンセントを抜き、学校へ行くことにした。

「午前7時28分……間に合うな

家から出で、しばらく歩いていると、バス停が見えた。バスももうすぐ着きそうだった。

信一は歩きでも学校へ行けるが、今日はなぜかバスに乗りたかった。自分の通う中学校の前にもバス停がある。今日はバスで登校しよう。朝のバスは席が沢山空いていた。出発してから数分経った。信一は次のバス停の名前は聞いてなかつたが、ある言葉が心に響いた。

『心の悩み、問題を解決する吉田心理カウンセラーにお越しの方はこちらが便利です』

信一は無意識に停車ボタンを押した。恐らく心理カウンセラーと言葉に引かれたのだろう。

信一はバスを降りた。ちょっと歩いた先に吉田心理カウンセラーという看板をつけた建物が見えた。

「どうしたの君？」

信一は突然後ろから話しかけられた、驚いた。「い、いえ。」
カウンセラーがあつたんだなって」

信一に話しかけた男は、天然パークの髪を無茶苦茶に搔いた。若い眼鏡の男だ。

「何か悩みもあるのか？」

「はい……ちょっとね」

「じゃあ、少し話しよう」

「はい？」

「おっと、自己紹介まだだつたね。僕は吉田幸三よしだこうぞう」

「じゃあ、あなたがここの中院長？」

「そうだよ」

信一は幸三に連れられて、建物に入った。中は思ったより綺麗だ。幸三は、紅茶を出した。

「それで、どんな悩みがあるかな？」

信一は紅茶を喉に流し込んだ。正直、紅茶は好きではなかつた。「悪夢を見るんです」

「悪夢？」

「……はい。ある日を境に毎日悪夢を見てこます」

「どのくらい経つ？」

「半年以上……」

幸三は驚いた。「半年以上も悪夢を見ているのか？」

「はい。いい夢なんか、もう見ていません。悪夢ばかりです」

幸三は興味本位で聞いた。「どんな悪夢だ？」

信一は深く息を吸つた。「生々しい夢です。他の人たちが僕を殺しに来る夢です」

「殺しに？」

「ええ。皆赤い目をしてます」

「何か、トラウマになるような出来事はあった？例えば家族から虐待されたとか」

信一はまた深く息を吸つた。『……実は、人が死ぬ瞬間を見たんです』

また幸三は驚いた。『人が死ぬ瞬間！？』

「はい……」

幸三は納得した。悪夢を見るわけだ。『どんな光景か覚えてる？』

『ええ……昨日のように覚えています。心臓麻痺や何かで死ぬ瞬間ではなく、大量の血が流れる生々しい瞬間を……』

幸三は半ば同情した。『君みたいな若い子の心に深い穴が開いたのか。これから暇な時間に来て欲しい。君の事をもっと知りたい』

『分かりました』

『今日はもう学校へ行きなさい』

幸三は信一を見送つた。

思い出

信一は走って登校していた。校門に着いた時には、時刻は8時45分。登校時刻は40分、5分遅れだ。

廊下を走っていると、誰かに当たった。「いつてーな！」

「『めんなさい！』走りながら謝った。

スライドドアを開けて教室に入った。

「信一君、遅刻だぞ！どうした？」

「寝坊です」

クラス中から笑いが出た。

「信一君つたら意外と不真面目」

「転校早々寝坊とは」

「マジうける」

蛇谷は生徒を黙らせた。「まあいい。席に座れ」

信一は席に座つた。

再びスライドドアを開けた。

「ういーす」

「森田！また遅刻だぞ！」

「いいじやないっすか？」

「規律はちゃんと守れ」

「やでーす。俺の人生俺の好きに生きます」

森田はシャツ出しをして、若干リーゼントヘアーだった。蛇谷は次の授業で使う道具を取りに教室から出た。森田は信一を見た。

「てめー！廊下でぶつかった奴だな！」

クラス中で囁き声が聞こえた。

「森田に当たるなんて」

「転校早々ついてないな」

「可哀そうに」

「終わつたな」

真希は信一の耳元で囁いた。「いざとなつたら助けてあげる

「え？」

森田は信一の胸元を掴んだ。

「てめー！痛かつたぞ！」

「信一は面倒くさかった。」「「」めんなさい……」って言つたじゃん

「「」じめんで済めば靈柩車は要らん！..」

「救急車じゃなくて？」

「なぜ警察や裁判や救急車、じゃなことと思つ？」

「なぜ？」

「てめーが死ぬからだ！」

森田は信一の右頬を殴つた。

「感謝料払え！」

「なんで払わなきやいけないんだ！別に苦痛レベルじゃないだろー！」

「骨が折れたよー！」森田は右脚で信一の横腹を蹴つた。

「ひどい！」

「や」今までこじりよー！」

「つむせーよ！お前らは黙つてろー！」

真希が立つた。「そろそろいい加減にしたらー？」

「つむせえ坂本！今の俺ならお前に負けないさ

信一は血が混じつた唾を飲んだ。「いいですよ坂本さん。止めなく
ても」

森田は信一を睨んだ。「ほう、俺に叶つたでしょ？」

「信一君？」真希は不思議がつた。

「森田さん。世間はあなたのことを何と言つて思つます？」

森田は首を傾げた。「なんと言つんだ？」

「社会のゴミ！」

森田の堪忍袋が切れた。「てめー！殺す！絶対殺す！」

殺す……その言葉を聞いた瞬間、信一はある過去を思い出した。殺
意が満ちた過去が……！

「ふ・・・殺すか・・・ふふふ

信一は笑いながら立ち上がりた。

「てめー何がおかしい！マジ殺すぞ！」

「殺す……君ごときが人を殺す」

森田は右手で殴りかかってた。だが信一は右手で受け止めた。

「は、放せ！」

だが信一は力を入れた。森田の？まれた腕に軋む音がした。

「い、痛てー！放せ！」

「お前は人が死ぬ瞬間を見たことがあるか？」

さつきまでの愛想の良い声ではなく、怒りに満ちた恐ろしい声だつた。

「ひ、人が死ぬ瞬間！？」

「人はまず、死ぬ瞬間を見ると、放心状態になる。そして放心状態から戻るといろんな感情を感じる。

恐怖や罪悪感や後悔などな。そして、それを克服すると……」

信一は森田の腕を放した。

「人は殺人鬼になる」

森田は信一の目を見た。その瞬間、森田は恐怖を感じた。信一から本気の殺意を感じた。こけ脅しや威嚇や見せ掛けではなく、本当の殺意と殺気を……！

「き、今日は見逃してやる！」

森田は自分の席に戻った。

クラス中の皆が驚いた。

「あの森田が退いた……」

「喧嘩しなかつたぞ」

「森田を退かせたのは誰以降だ？」

「真希ちゃん誰も」

信一は黙つて席に座つた。

蛇谷が戻ってきた。「皆、授業の準備したか？」

真希が信一に話しかけた。

「君、すごいね。あの森田を暴力なしで退かせるなんて」

「あなたも退かせたのでは？」

「ぶちのめしただけ。その日から因縁つけられた」

「ぶちのめしたつて……女は怖いな。

紀子は真人に話しかけた。「やつぱりあの人は封鎖事件の生還者なんだわ！」

「なぜそうなる？」

「だつて、人の死ぬ瞬間つて、封鎖事件でも自衛隊が一般生徒を射殺したつて。その時のことでしょう」

「結びつけるな」

その日1日はいつも通り授業が終わり、下校の時間が来た。

「あ、そうだ」蛇谷は信一に何か紙を渡した。

「入部届けだ。部活を決めなくちゃな

「はい」

奈々子が信一の席に来た。「剣道部はどうだ？君ならきっとできる」「聖夜が来た。『いやサッカー部だ。運動神経良さそうだからな』

「考えときます」信一はそう言つて教室を出た。真人は信一を追いかけた。

「相沢君！待つて！」

信一は真人を見た。「何でじょうか？」

「君、今朝のあれはすごかつたね」

「どうも」

「陸上部に来ないか？きっといい成果を出せるぞ。家でゆっくり考えるといい」

「検討します」

信一は校門を出た。だが何を考えたか、バスに乗り、駅まで行った。そして電車でどこかへ行つた。

何度も乗換えをしてたどり着いた。そしてしばらく歩いていくと、ある学校に着いた。

大羽中学校。信一にとつて忌むべき場所であり、かつて友人達との思い出の場所。

あの事件以降、この学校は黄色いテープを張つたままだ。中には入れなかつたが、近くで看板を見つけた。

『この学校は、今年11月に取り壊しをします』

「取り壊しか……」

悲しい気もしたが、早く壊れてほしい気もした。ここで「感染」があつた。現実のものとは思えぬ感染が……

信一は、しばらく故郷を満喫して帰ることにした。だが、後ろから誰かに話しかけられた。

「信一君？」

後ろを見た。中年の肥満の女が居た。「覚えてる？菊池です。小学校の頃の先生」

思い出した。見た目は不細工だが、結構いい先生だったな。

「小学校の頃に君は物静かな子だつたね」

「今もそうです」

「何かおごりうか？」

「いいです。もう帰るんで」

「そう、さようなら」

「さようなら」

信一は菊池と別れを告げて帰つた。再び電車に乗り、東京まで帰つた。辺りはもう暗かつた。

信一は、人気の無い道を歩いていると、何者かの気配を感じた。勇気を振り絞つて後ろを見た。

フードを被つた男が立つていた。夏なのにマフラーもしている。だが、人間らしい生気が感じられない。

「まさか……な

男は顔を上げて信一を見た。

その瞬間！

わめき声を上げながら信一に走った。

「嘘だろ！」

信一は男から逃げた。

「まさか！まさか！」

男はわめきながら信一を追つた。信一は左の建物と建物の間を通りた。間から出ると、真っ直ぐ走つた。次の角を左に曲がると、今度は右に曲がつた。

だが、無情にも行き着いた先は行き止まりだつた。

「誰かに助けを求めるべきだつたな」

だが、信一は風邪気味だつたため、大声は出せなかつた。

信一は道に戻ろうとしたが、追跡者が信一を見つけた。

「絶体絶命！」

信一は、力を振り絞つて走つた。追跡者もわめきながら信一に向かつて走つた。そして正面衝突 ではなく、信一は体当たりを繰り出した。追跡者は尻餅をついた。

「今だ！」信一は追跡者の頭を思いつきり蹴つた。そして走つた。追跡者も立ち上がり、信一を追つた。

信一は火事場の馬鹿力で走つた。必死の思いで走つた。だが、追跡者は信一に追いついた。

信一は、追跡者の腹部に思いつきり殴つた。

そして逃げた。攻撃で体力を削るより、逃げることに専念した。突然、ある記憶がよみがえつた。

大勢の狂暴な人間から逃げていた記憶が…

信一は必死の思いで走つた。追跡者のわめき声は遠ざかっていく。だが、ただひたすら、信一は走つた。走つている。それが最後の記憶だつた。

提案（前書き）

【追加新登場人物】

大澤知冬

生物学者。かなりの優秀な学者で美人だが、少々変態な所がある。京子曰く、ノーベル賞を取つてもおかしくない。

坂本京子

真希の実の母。優秀だが、才能を發揮しきれない。研究員用の宿舎で泊まっているため、家には帰っていない。スタイルの良い美人。

坂本良治

真希の実の父。ウイルスの関しては優秀。京子同様家には帰っていない。

信一はベッドの上で目を覚ました。

h h

眠りが浅かったのか、まだ意識がはつきりしない。

「……？」

信一はほつもありしない意識の中、何かに抱きついた。

抱き枕だな！信一は抱き枕を抱いた。だが、両手で何か握った

四庫全書

両手は柔らかい感触が走る
実はされに心地が良い
「ほほ」

たが、前にも似た状況があつた。
信二はゆつくり用を聞け。

誰かの後姿が見えた。その人に抱きついてしまったらしい。

その人は女だつた。

「おおおおおおおお」

の女将が居る。「う

聞こえる声だ。

「おや、せ、信一君は何で落つたのかな？」

真希たこた

「なぜ真希さんた……？」

よく部屋を見渡すと、確かに女子らしい部屋だった。

「なぜ僕が、真希さんの部屋に？」

真希でいいな。家の前で倒れてから、慌てて中に入れて寝かした。

家の前で倒れていた?はて、昨日何があったのだろう?思い出せな

い。

「昨日、何があつたの？」

「こっちが聞きたいくらいだ。昨日は確かに……故郷から帰った後に何か……思い出せない。」

「すいません。思い出せません」

真希は氣の毒そうな顔をして、テレビをつけた。

「……昨夜、変質者が警察に逮捕されました」

「信一はテレビに釘付けになつた。

「変質者は、わめき声を上げながら、通行者を殴る蹴るなどの暴行を加え、さらに拘束してくる警察にも暴行を加えました。変質者の精神は完全に錯乱しており、警察は、新種の麻薬か何かを摂取したと見て、捜査を始めました」

「へへ怖いわね」真希はそう言つた。

「信一は全てを思い出した。そうだ！ 昨日は見知らぬ男に追いかけられたんだ！」

「信一はテレビの時間を見た。午前8時40分。

「やばい！ 学校遅刻した！」

「今日休みだよ？」

「そうだ！ 今日は土曜日。部活以外の人は休日だ。

「真希さん。ご家族は？」

「真希でいいよ。基本的に両親は仕事で帰つてこないんだ」

「じゃあ、いつも1人？」

「そういう事。君は？」

「俺も」

「一緒に住もうって話だよ」

「真希は同胞が居たと言う田で信一を見た。そしてある提案をした。

「私達、同居してみない？」

「え？」

「信一は返答に困った。「僕達はまだ中学生だよー」

「年なんて関係ないよ。私、料理は出来るし

「僕だつて」

「でも、どうせ作つてないでしょ。食べる人がいないと作り甲斐が無いからコンビニの弁当ですましてるでしょ?」

図星だつた。信一はこれ以上反論出来ないと判断した。だが、孤独でいる寂しさを無くしたかつたのも事実だ。

「…分かりました。けど嫌らしいことはしないで」

「分かつてる 今日は私んちに泊まりなさい」

「博士、今回の実験はどうします?」京子は大澤に尋ねた。

大澤は甘い声で、京子を惑わすように言つた。「そうね~、血液採取してからにしましょう」

「はい。分かりました」

大澤はからかう田で京子を見つめた。「そういうえば、旦那さんは?」京子は返答をためらつた。「あれを研究中です」

「そうねえ~、彼も徹夜で働いているはずだから、疲れたんじやないかしら?」

「そうですね」

「私、彼の性的欲求を満たして上げましょうか?」

京子は、頬を赤くした。「何てこと言つのですか!…」

「ふふふ・・・・冗談よ」

相変わらずこの人は苦手だ……

「それで、どちらの方で実験しますか?」

大澤は迷つた素振りをした。「第1号にしましょう

「つまり彼女ですね」

「ええ。あの可愛い実験台」

実験台……まだ若い子なのに。

「第2号の様子は?」

「だいぶ大人しいです」

大澤は、両手をアルコール消毒し、研究室に入った。

実験台の上には、マスクをした少女が縛りつけにされて寝かされて

いた。

京子は、注射器で少女の腕から血液を採取した。
「IJのような事をしてお詫びします。あなたは危険なウイルスの保
菌者なので」

「分かつてます……」少女は悲しげな声で答えた。

京子の心が痛んだ。

大澤は京子の耳元で囁いた。「今日の午前中に新ワクチンで実験よ
「分かつています」

2人は研究室を出た。

迷彩服を着た男が待ち受けていた。

「大澤博士！なぜ感染者が外部に現れた！？」男は明らかに怒つて
いた。

大澤は子供を相手にするような態度を取っていた。「相沢陸将殿。
落ち着いてください」

「落ち着いていられるか！もし大流行パンデミックが起きたら元も子もないぞ！」

「感染者が外部に現れた事実はありません」

「嘘をつくな！」

「今日のニュースを」覧になりましたか？現れたのは感染者ではなく、
変質者です。感染者が出た証拠はありません」

「事実の隠蔽はお前らの特技だろ？」

「そんなに疑うなら、私達の研究所のセキュリティーを確認してく
ださい」

相沢陸将はしばらく大澤を睨んだ。「まあいい。今回は大目に見よ
う」そう言つて大澤から離れていった。

大澤は京子に囁いた。「感染源は？」

「調査中です」

大澤は舌打ちをした。今回は誰も感染しなかつたが、感染源は知つ
ておかないと。

最近出来た、血液を売りつけることが出来る巨大な病院のよつな場所だ。

そこへ1人の男が入つた。カードを取つた。67番だ。男はベンチに座つた。隣には、フードを被つた男が座つていた。

「血液売つたことあるか？」男はフードの男に話しかけた。フードの男は首を横に振つた。

「俺は何回もある。何回でもOK！」

名簿を持った女性が来た。「岡本大輝さん。来てください」フードの男は立ち上がりつた。そして男に親指を立てた。

大輝は女性にどこかに連れて行かれていた。細い1本通路だ。「1年内にピアスやタトゥーを入れましたか？」

「いや」大輝は咳きした。

「親切の方はいらっしゃいませんか？」

「いい」

「持病は？」

「ない」

「もしもの時の緊急連絡先は？」

「ないね」

「ご家族は？」

「いないと言つただろ？」

目的地に着いた。大輝は急に不安になつた。「家族が居ないと血液は売れないのか？」

女性はパスワードを打ち込んだ。鉄製の自動扉が開いた。

「そうではありません。実はあなたの血液に異常が見られて」

「異常？」

部屋は真ん中に1つの鉄製の椅子があつた。その椅子の近くに男が立つていた。

警備員が大輝の腕を掴んだ。

「何をするんだ！」

扉が閉まつた。「お前は何者だ？」

大輝は椅子に座らせた。

女性は微笑みを見せた。「あなたの血液型は初めてです」

男性も笑みを見せた。「朗報と悪報がある」

男性はチューブを取つた。チューブは吸引機に繋がつていた。

「朗報はあなたの未知の血液型は闇市場では高く売れる」

男性はチューブに針をつけた。

「悪報は、あなたは死ぬ」

大輝は泣き出した。3人は笑つてその姿を見た。

だが、大輝は突然笑い出した。3人とも戸惑いを見せた。

大輝は女性を睨んだ。大輝の目は、白目の部分が黒く、黒目の部分が白かつた。そして瞳孔は爬虫類のようだつた。

大輝は女性の首を右手で絞めた。そして、首筋を噛み付いた。

男性は扉まで走り出した。警備員は拳銃式スタンガンで大輝を撃つた。だが大輝は痺れている素振りを見せなかつた。大輝は警備員の肩を掴み、投げ飛ばした。警備員は壁に当たつた。壁のコンクリートにひびが入つた。

大輝は男性に近づいた。男性は必死にパスワードを打ち、扉を開けた。

だが、大輝は男性の顎を右手で掴んだ。瞳が赤くなつた。

「朗報と悪報がある」

大輝は、鮫のような鋭い牙を見せ付けた。

「朗報は今日の俺の飢えは凌げる。悪報は、お前は死ぬ」

大輝は監視カメラに気づいた。監視カメラに向いた。

「見てるか？お前らには反吐が出るぜ」

大輝は男性を見た。

そして、首筋を噛み付いた。

部屋中に男性の悲鳴が響いた。

「信」と真希は一緒にマクドナルドで昼食を食べていた。

「真希さん。女子なのにビックマックだなんて？」

「真希でいい。だつて食べた気がしないもん。君だつて男子なのに

チーズバー ガー だなんて」

「チーズバー ガー はアメリカで人気なんです」

2人は冗談交じりの会話を楽しんだ。

2人目の転人生

月曜日の朝

真人は教室に居た。「まだ信一君との距離は縮まつていない。これからどうする?」「本当に困つた作戦だ。

紀子は真人に近づいた。「で、信一君との距離は?」

「100%中、0.001%」

紀子はため息ついた。まったく、先が思いやられる。

「広報委員石川紀子は居るか?」

鳥山と猫田がやつてきた。

「おい、あれ狐狩りじやないか?」

「紀子、今度は狐狩りに手を出したか?」

「アーメン」

紀子は、そんなクラスメートの囁きを無視して、2人の不良の元に来た。真人も着いてきた。

「で、何のようよ?」

「はつはつは! 相変わらず氣の強い女だ」

「くくく・・・俺達狐狩りと同等になつたつもりか?」

2人の不良は校長室へ連れて行つた。校長室には液田井……ではなく總統と蛸田が待つていた。

「石川広報委員。情報がある」總統は悪役っぽい声で言つた。

「朗報?」

「蛸田、言え」

蛸田はファイルを持つて説明した。

「2つあります。1つ目は、信一君は、あの事件の生還者の可能性が高くなつてきた」

紀子は興奮気味だった。「そりこなくちゃや!」

「2つ目は?」

「2つ目は、君たちのクラスにまた転校生が来る
これは朗報だ。真人はそう思つた。

「男子か、女子か？」

「美女だ」

「ほほ～またまた朗報だ。

「もうすぐチャイムが鳴るわ。戻りましょう」

信一は走つて登校していた。寝過ごしてしまつた。真希は生徒会の仕事があつたから先に登校していた。チャイムが鳴つた。また遅刻しそうだった。

廊下を走つていると、誰かにぶつかった。外見上、森田ではないことは確かだつた。だが、走ることに夢中だつたため、顔は見ていない。

「あ、待つて」女子だつた。

「ごめんなさい！」

信一は走りながら謝つた。

教室に着いた。

「あれ、まだ先生は来てない？」

信一は自分の席に座つた。

「危うく遅刻しそうだつたね」真希が話しかけた。

「ええ、まったくですよ」

スライドドアが開き、誰か入つてきた。

女子だつた。自信に溢れた歩き方をしていた。ツインテールの髪型をしていて、人気アイドル風のルックス、巨乳、まさに男子のツボを抑えたような容姿だ。いわゆる美人。

まったく、この学校は美人が多いだこと。信一はそう思つた。だが、周りの男子達は興奮していた。

「おお！やつと我らがアイドルが旅行から帰つてきた！」

「ああ、幸せ！」

「一枚写真を取らせてください！」

きもい！まるでオタクだ！

「あの、真希さん。あの人は？」

真希は信一の耳元で囁いた。「綾瀬マコ。容姿端整、成績優秀、運動神経抜群、歌もうまい、家事も出来る、まさにこの学校のアイドル。あの子を泣かすと、学校中の男子を敵に回すよ」

近代の男子は怖いな。

マコは笑顔で返事を返していたが、信一を見ると、男子の声を無視して信一の下に来た。

「あなた見かけない子ね」声もアイドルらしい。だが信一の好みではなかつた。真希の方がまだ好みだな。あるいは……

「最近転入して来たんです。たぶん、転入当日あなたはいなかつたふくんとばかりに、マコは信一をじろじろ見た。

「ふふふ、不思議な子」

信一は頭が痛くなりそうだつた。

「今日から付き合つてください」

ええー！…信一だけでなく、クラスメート全員が驚いた。

「どうこいつですか！マコさん！？」

「そうです。そんな男より俺と！」

「いや俺と！」

信一も納得できない。なぜ初対面の女子が男子に告白するんだ？

「あ、あのう、なぜ僕を？」

「一田ぼれ」

もう頭がおかしくなりそうだ。

蛇谷がやつと来た。「綾瀬、来たのか？席に座れ」

マコは席に座つた。

「えーと…今日も転入生が来る。皆、仲良くな

また全員騒ぎ出した。

「男かな？女かな？」

「美人がいいな」

「美少年でしょ？」

真人と紀子は、すでに性別を知っていた。

「入れ」

スライドドアが開き、女子が入ってきた。
美少女だ。ロングヘアで、白い肌、可愛らしいルックス、真人に
とつては綾瀬とは負けず劣らずの美少女だ。まるで天使。だが、無
口そうだな。感情が表に出ていな。

だが、信一は興味が無いのか、窓の外を見ている。

男子達は囁き声で話した。

「あのー、めっちゃ可愛いじゃん！」

「うんうん！ 綾瀬さんとは違う可愛いしさだ」

「やべ、超俺の好みだ」

「俺、思い切ってアタックしようかな」

「無理無理。俺くらいじゃないと」

蛇谷は呆れた顔で男子達を見た。「うるさいぞ。黙れ」
転入生は自己紹介をした。

「立花裕香です。これからお世話になります」可愛らしい声だ。

信一が名前を聞いた瞬間、転入生の顔を見た。

「立花！」明らかに驚いていた。

立花は信一を見た。「信一君！？」こちらも驚いていた。

クラス中も驚いていた。

蛇谷は2人に聞いた。「面識はあるのか？」

信一と立花は縦に首を振った。

「ええー！！」クラスメート全員驚いた。

真希が尋ねた。「一体どういう関係？」

立花が答えた。「昔の友人です」

信一が訂正した。「いや、幼馴染だ」

他の人も質問しようとしたが、信一と立花がこれ以上聞かないでく
れと言う目をしたので、やめた。

紀子は真人に話しかけた。「もしかして、あの娘も事件の生還者か

も

真人は呆れた。「だから、結び付けるな

信一と立花は屋上に居た。

「お前も東京に来たのか」

立花はうなずいた。「ええ…

「久しぶりだな」

「ええ…」

相変わらず無口だな。「まあ、仲良くなつていい」

「ええ」

「懐かしいな。あの時の友人達が」

「ええ…」この時だけ、悲しそうな声だった。信一にもこの気持ち
は分かる。

立花が信一に質問した。「もう、あのく感染くは起きないわよね…

…？」

「たぶんな

感染…この言葉で急に不安に駆られた。

信一は近いうちに感染が出てきそうな予感がした。

「出来れば、あのく感染くは起きてほしくないな

2人目の転入生（後書き）

【追加登場人物】

立花裕香

転入生。【大羽中学校封鎖事件】の生還者。好意を抱いていた男が事件で死んだ。

動き出す歯車（前書き）

【追加登場組織】

本州生物科学研究所機構

東京都内にある生物科学研究を専門とする機関。活動内容は非公式であり、バイオセーフティーレベル4の施設を持つ。

京子は急ぎ足で研究所内の廊下を走っていた。まったく、この研究所の内部構造は複雑すぎる。最近の空母も内部構造を複雑化していると聞いているが、何もうちの研究所まで複雑化しなくとも……すると、ある立て札が見えた。第1会議室…ここだ！

扉を開け、中に入った。

中では既に十数人の自衛官、研究員代表達が会議をしていた。

「遅いぞ、坂本君」自衛官の1人が注意した。

何なら、内部構造を簡単にしろ！と思つたが、口にはしなかつた。京子は謝りながら、大澤の隣に座つた。大澤は耳元で、甘い声で言つた。「遅いわよ？ 次遅れたら、あなたの旦那さんを貰つちゃいましょうか？」

京子は鳥肌立つた。「やめてくださいー！ うちの主人は浮氣はしない人なんです」

「うふふ、冗談よ」この人の冗談は本気に見える・・・

若い唯一の女性自衛官がファイルを整えて喋り始めた。女性自衛官は存在感を誇つていた。「正直言つて、こんな事態は初めてです」大澤は首を傾げた。「何のことですか？」

自衛官の1人が言つた。「そがり研究所側で研究している新種ウイルスの感染者が都内で現れた」

京子は心配な気持ちで大澤を見た。だが、大澤は余裕そうだ。「ニュースキスターが語つたように、あれは新種の麻薬か何かを摂取した変質者です」

自衛官が全員笑つた。「もつとましな言い訳は出来ないのかね？」

京子はこの言葉に同感だった。言い訳するならもつとつまくできないのかしら？

だが、大澤は自信満々だった。京子は驚いた。一体この自信はどうからくるのかしら？

大澤は口を開いた。「何なら、うちのセキュリティを確認してください。蟻一匹通しませんよ」

自衛官は質問した。「なら、なぜ警察に拘留されていた変質者の身柄を引き取ったのだね？」

「新種の麻薬に興味がありまして」

1人の自衛官が遂に怒りを露わにした。「ふざけるな！！麻薬何かを研究するために、この研究所があるわけではない！」

大澤は笑いをこらえていた。京子は大澤の精神がどうなっているか気になつた。大澤博士は1回精神病院に行つたほうがいい。そう思つた。

女性自衛官は再び言つた。「私は変質者の正体なんてどうでもいいのです。でも、そちらが研究している新種ウイルスが大流行したら、どう責任を取るのですか？」

大澤はまたしても余裕そつだつた。「異種への感染は見られません。ウイルスは靈長類のみに感染します。東京に野生のチンパンジーなんて居ませんし、人が感染しても、感染者を即時隔離すればいい」女性自衛官は負けまいと喋つた。「確かにそうですが、あのウイルスはあまりにも危険です。未知の部分が多く、感染者を狂暴化させるなんて。そして何よりもワクチンや抗ウイルス剤がありません」確かにワクチンが存在しない。ここはどう言い訳するのだろう？大澤は微笑みを見せた。「安心してください。空気感染はしません。接触感染のみです。ウイルスは感染者の血液中や唾液中でしか存在しません。つまり、感染者とセックスしない限り、感染しません」下ネタを言えるくらいの余裕がありますね。うん。

「でも・・・」言い終える前に、誰か入つてきた。

「松永3等陸佐。何を恐れている？」相沢信也陸将だつた。半そでの迷彩服を着て、まだ力を入れていないのでかなり発達した筋肉が目立つた。顔も端整だ。その圧倒的存在感とカリスマ性を誇つていた。

渋い声で女性自衛官に話しかけた。「松永3等陸佐、一体何を恐れ

ている？」

先ほどまで存在感を誇っていた女性自衛官松永3等陸佐も、相沢陸将の前では小さく見える。

松永はしばらく間を空けたが、口を開いた。「^{パンデミック}大流行……いえ再発です」

相沢は松永を見つめた。「再発はありえない」

松永は少しむつとした。「けど再発したら？」

相沢信也はため息をついた。「あのく作戦>を発動するまでだ」

「大羽封鎖事件の二の舞ですよ？」

「大流行を防ぐためだ。政府の承諾済みだ」

京子は一瞬身震いした。あの作戦に政府が承諾したなんて……

信也は大澤を見た。「大澤博士、ワクチン開発はどこまでいった？」

大澤は甘い滑らかな声で言つた。「まだ第2段階です」

「完成まではまだか……」

「はつきり言えば、そうですね」

会議は終わった。大澤は京子を連れて、バイオセーフティーレベル4の施設に向かつた。

「ワクチン開発、思つたより手惑いますね」京子は皮肉っぽく言つた。

大澤はいつもの惑わすような声で答えた。「黒木博士が居ればな……」

黒木博士？聞いたこと無いわね？「誰ですか？」

「黒木大輝」いつもの惑わすような声ではなかつた。どうしたのだろう？

「生物学者でとても優秀な学者だつた。同世代の人は皆エイズのワクチン開発もできそうな人だつて言われたくらい。けど、彼は別のウイルスを研究してた。それが何かは不明だけど」

この博士は人を尊敬しない人物だ。その博士からまさかあの言葉を聞けるなんて……

黒木大輝……一体どういう人物なのかしら？

真人は物凄いスピードで数学の宿題を進めていた。今日は数学の宿題の提出日だった！

聖夜が真人を見た。「すごいスピードだな。真人」

「話しかけないでくれ！宿題を終えてなかつたんだ！」
本当にやばい！うちの数学の教師つて提出日守らないと怒るんだよな。めっちゃやばい！

真斗が真人の様子を見ていた。真顔で見られると何か怖い。真人はやつと宿題を終えた。だが真斗が真人に言った。「1番と5番と9番が間違ってるよ……」

真人は指定された問題を計算しなおした。確かに間違っていた。

「サンキュー真斗」

「……サンキュー……？」

「いつ、サンキューの意味も分からぬのか？」「ありがとうだよ」「発音間違ってる……」

発音の問題か！確かにアメリカ人はテンキューって言うな。

「ありがとう」

聖夜が不機嫌そうに言った。「何かおなら臭くね？」

「真人、お前か？」真人は首を振った。

「黒崎、お前か？」「違う……」

「武田、お前か？」「大佐つて言え。違う」

「トリエンド、お前か？」

トリエンドは笑いながら言った。「お前のおならじやね？」

「どういう意味だ？」

トリエンドはおならをする真似をした。そして手を尻につけた。「こ

れ、おなら」

そして、腕を股に通らせて自分の顔に近づけた。

「お前は自分でおならをしたんだ。そして、お前のおならは自分の股を通つて、お前の鼻まで来たんだ」

全員笑つた。「トリエン面白い！」

聖夜はより不機嫌になつた。「トリエン、マジ後で殺す！」

真人は忠告した。「殺したら少年院行きですよ」

「真人！お前も殺す！」

真人は「ひ～助けて」と言いながら真斗を見た。真斗が一瞬笑つていた。

今日はついてる。宿題が終わつたし、真斗のレアな笑顔も見れたし。

午後9時24分

サングラスをかけた男が、どこかのお店の裏側で煙草を吸つていた。若い女性が近づいてきた。しめしめ、お密さんだ！

「いつものお願ひ」そう言って、2000円を渡してきた。いつものね。男は粉の薬みたいなものを渡した。

女は早速歩きながら、粉を吸つた。

男はまた煙草を一服吸つた。これだから、これはやめられね～。ふと、フードを被つた男が、男に首でこつちに来いと呟囁した。

男は行つた。そこは、人気の無い歩道橋の下だつた。

男は、フードの男に言った。「俺は野良。^{のら}お前は？」

「岡本だ」

野良は質問した。「夏なのにフード付きトレーナーとマフラーつて暑くないか？」

「暑いね」

おかしな奴だ。野良はそう思つた。

岡本は質問した。「何がある？」

「コカイン、アヘン、ヘロイン、何でもあるぜ」

「何でも？」

「ああ。ここだけの話、麻薬販売はやめられないね。一度でも麻薬に手を出すと、そいつは中毒者になつてな、麻薬を欲しがる。だから売り上げもあがる。いい利益だよ」

岡本は興味なさむつに言った。「さつきの話は本当か？」

「何が？」

「何でもあるつて？」

「ああ本当だ」

「何でも？」

「ああ」

「本当に？」

「ああ」

岡本は微笑した。「じゃあ貰つよ」

よし来た！野良はそつまおうとしたがやめた。「何が欲しい？」

「お前だ！！」

岡本は野良の肩を掴み、近くの違法駐車している車に投げ飛ばした。野良は車のガラスを割つて車内に突つ込んだ。岡本はドアを開けて、野良を車内から引きずり出し、無理やり立たせた。

「俺はお前が欲しい。俺の偉大なる計画の為に！」

岡本の周りには、3人フードを被つていた人が居る。

「お前には、俺の駒になつてもらつ」

岡本は野良の首筋を噛んだ。

そして、自分の唾液を送り込んだ。

野良は、道に倒れこんだ。全身に激痛が走る。

口から大量に血が吐き出る。頭痛がしたが、数秒で終わつた。車のサイドミラーで自分の顔を見た。

目が赤かつた。

その瞬間、意識が途絶えた

保菌者（前書き）

【追加登場人物】

少女

中学生くらいの外国人。新種ウイルスの保菌者で本州生物科学研究機構にて監禁されている。

保菌者

少女は、真っ白な部屋の閉じ込められていた。寝台、トイレ、流し、テレビがある。ドアには強化ガラスの窓があった。一体、こんな所に閉じ込められてどれくらい経つたのだろう？半年以上経つたかな？あの日以来、外の世界を見ていない。

今日の実験時刻は午後5時、今は午前9時……まだまだ時間は沢山あるわね。

友人も家族も親しい大人も居ないこの部屋で、彼女はテレビをつけた。

「ニュースです。昨夜東京都渋谷にあるナイトクラブで乱闘が発生しました。目撃者証言によると、午後8時ごろに怪しい格好をした集団がクラブ内に入り、近くに居る男性を突然暴行を加え、止めに掛けた男性らにも暴行を加え、乱闘に発展しました。なお、暴動を起こした集団は逃亡、噛み傷などの重傷を負つて8人が病院に搬送されましたが、搬送先の病院で2人が死亡しました。なおふくん。最近の日本は物騒ね。

そう思つた瞬間、電灯が消えた。一体どうしたのだろう？

外の警備員の声が聞こえた。「一体どうした？」

「停電です！」

「停電！？ならなぜ緊急用発電機は？」

「正、副、予、全ての発電機が起動しません！原因は不明です！」

「とりあえず研究員を安全な場所に移動させろ。何人か集めて発電機を見に行こう」

「<保菌者>は？」

「ここは安全だ。今はほつとけ」

警備員達が走つていくのを確認した。

この施設は、ほとんどがコンピューターに制御されていると聞く。もしかして

少女は独房とも言えるこの部屋の扉を引いてみた。すると、扉はあつさり開いた。

少女は外の世界を目指して、研究所の扉に向かった。だが、道に迷つた。

「どうしよう？」

警備員らしい人物が近づいてきた。少女は仕方なく、近くの女性用トイレに入つた。

トイレの流し台にバッグが置いてあつた。

バッグの中をあさつてみると、財布が入つてあつた。盗みは本来しあくは無いが、〈外の世界〉では金は必要だ。この際、仕方が無いな。

トイレには窓があつた。窓を開けてみた。ここは1階だつたため、すぐに対外に出れる。少女は迷い無く、窓から外を出た。

外は青い大空が広がつており、太陽が堂々と地上を照らしていた。

「綺麗、空がこんなに綺麗だつたなんて・・・」

少女は大空を眺めていた。心の浄化と言つ言葉は、こんな時に使うんだ・・・

外の世界は今は真夏なため、気温はかなり高いが、ずっと冷房の効いた寒い研究所に居た少女にとつては、この暑さは暖かく感じた。本当に久しぶりの外の世界をもつと満喫したかつたが、一刻も早く研究所から離れなくては！

少女は走り出した。当ても無く、ただひたすら走つた。

小さな洋服屋の年老いた男性店主は緩やかな動作で煙草に火をつけ、その味を楽しみながら、新聞を読んだ。

ナイトクラブの暴動、政治家の賄賂問題、小学生の殺人事件などが載つていた。まったく最近の日本人は腐つている。いや、人間はいつの時代でも腐つてゐるな。わしを驚かせるまともな人間は出てこないのかね？

彼は煙草をもう一服、深々と吸い込むと、新聞紙を投げ捨てた。

その時、店に誰か入ってきた。

「いらっしゃーい」大きな声で言つた。お客は中学生くらいの外国人の金髪少女だった。

「おや、お前さん学校はどうした?」

少女は、少し間を空けて答えた。「病院から抜け出してきたんですね」滑らかな日本語だ。

確かに格好は病院の入院患者みたいだな。「お客さん、病院から抜けちゃ駄目でしょ?」

「残りの人生を、外で過ごしたいの……」その声は悲しげだった。その瞬間、店主はこの娘の言動と姿で、自分の孫を連想した。かつて病室で死に、人生の最後まで外の世界を満喫できなかつた孫を…。

少女は口を開いた。「服をください。どんな服でもいいです」店主は迷い無く言つた。「それなら、このワンピースがいい」店主は白いワンピースを差し出した。胸元にはピンク色のリボンがあつた。

「着てみてくれ」

少女は更衣室でワンピースに着替えた。そして更衣室から出た。その姿を見た瞬間、店主は恋心と似た感情を抱いた。「本物の天使だ」と言おうとしたが、声が出なかつた。

「おいくらですか?」少女は財布を出し、金を払おうとした。

「いいよ。老いぼれ爺からのプレゼントだ」

少女は驚いた顔を見せた。「いいんですね?」

「ああ。どうせ誰もそのワンピースを買ははしないよ。今時ワンピースなんか流行らないからさ」

少女はとびっきりの笑顔を見せた。「ありがとうございます!」その笑みは魔術だ。この少女には今時の少女には無い、本物の美しさと魅力があつた。少女はお辞儀をし、またお礼を言つて去つていつた。

不思議な少女だった。彼はレジに戻つた。レジには2000円が置

いてあつた。きっとあの少女の仕業だな？「まったく、お釣りのの

500円を渡し損ねたな」

彼は、腐った世の中で、まともな人に出会えて満足した。「世も捨てたもんじやないな」

煙草に火をつけ、一服吸つた。

少女は歩き続けた。世の中親切な人も居るものね。彼は元気にして
いるかしら？
もう一度会いたいな……

あなただから話せること

真人は国語の授業を受けていた。後ろでは聖夜が不機嫌そうにペン回していて、隣では真斗が真剣にノートを書いていた。まったく、いつも通りだな。唯一変わったこと言えば、信一君と真希がお互いに分からぬことを教えあっていた。楽しそうだな・・・。遂に授業が終わった。もうすぐお昼ご飯だ。楽しみだな。

スライドドアが開き、誰かが入ってきた。

「よう！真人」

「尾田か」

尾田は今日も赤いコンタクトレンズをしていた。

真人はいい加減呆れてきた。「その悪趣味なコンタクトはずせよ」「ああ、悪い悪い」そう言いながらはばはばなかつた。
「今日は妙に機嫌がいいな」

「実は、学校の登校中に女の子とすれ違つたんだ」

聖夜と武田とトリエンが近づいてきた。

「どんな女の子？」トリエンは興味津々だった。

「白いワンピースを着た外国人。同年齢だと思つけどその子無茶苦茶美人で思わず見とれちまつて」

トリエンは羨ましがつた。「いいな、俺も会いたい」

聖夜も珍しく興味津々だつた。「言葉で表すとどのくらい美人だ？」

「綾瀬さん以上だよ！..」

綾瀬は勢い良く席を立つた。「私以上ですって！？」

「ああ。そうだな、お前を言葉で表すと天使、だが俺が今日会つた人を言葉で表すと女神」

綾瀬は明らかに苛立つた。「お前の目は節穴か！何ならなぜ同年齢の奴が学校サボつてるんだ！ああ

「す、すいません」

女子つてこえ！。真人ははつきりそう思つた。その瞬間、何者かに

肩を竹刀で叩かれた。

「いてえ！」

「隙だらけだぞ」

「奈々子！いい加減にしてくれ！」

奈々子は余裕な顔を見せた。「いい加減にしてるぞ。本気で叩いたら肩が外れる」

「五右衛門！真の武道の道を教えてやれ！」

「油断は死を招くぞ」

畜生！何で俺の友人はろくなのがいないんだ！？

真人は真斗を見た。微かだが笑っていた。

「黒崎真斗！人の不幸を笑うな！」

「……ごめんなさい……」少し泣き目だつた。

「い、いや俺が悪かつた。ごめん・・・怒鳴つたりして」

聖夜は上機嫌になつた。「おつと、真人が女を泣かせている。これはどう思いますか、大佐？」

「紳士として最低だな。真人」

真人は焦り始めた。「悪かつた！俺が悪かつた！」

またスライドドアが開いた。

真希が開けた主を見た。「小島ちゃんがアメリカ旅行から帰つてきた二ヤ」

全員、驚いた。

真人は小島香美に話しかけた。「香美、帰国はもう一ヶ月後じゃなかつたけ？」

「予定が変更になつて、今日になりましたわ」

小島香美は美しく長い黒髪を持ち、アイドルスターのように愛くるしい容姿で、中学生らしからぬ威圧感があつた。

彼女は信一に気づき、近づいてきた。

「あなた、転入生？」

「はい」

「わたくしは小島香美ですわ」

信一はこういうタイプの女性は苦手だ。
たぶん

「わたくしが友達になつて差し上げますわ」

「今何て？」

「この学校でエリート中のエリートであるこのわたくしが、あなたの友達になつて差し上げると言つてるのですわ」
やつぱり苦手なタイプだ。今の日本は男尊女卑が弱まつてきてるから、女子が段々生意気になつてきてるんだよな。こいつも結構なんつか、自信溢れすぎていて苦手だ。

あの申し出を断つておいた。「いえ結構です」

その瞬間、クラス中が「やつちやつたよ」と謎のムードに包まれた。「あつあつあなたねえ! ?」のわたくしの申し出を断ると「?」

「ああ」伸びた。

香美は信一を引っかき始めた。

「やめやめーおかしこぞお前！」

真希は信一の腕を引つ張つて、廊下に逃げた。

「ナニヤア」

行本丸

香美は「僕」と真希を連いかげた
「は、はい！」

氣づけば小島は追いかけていなかつた。信一と真希は屋上で休憩し

ていた。

「波女はフリーダムが高ニヤ。フリーダムを傷つける運動は空えめに

卷之三

「はい、以後気をつけます」

信
一
は、
座
り
込
んだ。

「それで、逃げ足速い

「前の学校でご教え逃げ回つては、今

「前の学校で龍矢選ばれてたんで、

「何がある？」

信一はしばらく考え込んだ。この人ならもしかして・・・

「秘密を守ってくれるなら、前の学校のこと話します」

真希は首を縦に振った。「秘密は漏らさないニヤ」

信一は深く息を吸った。「僕は・・・」

次の言葉を出そうとするたびに、頭の中で恐ろしい奇声が聞こえた。

「大丈夫?」

「僕は・・・」

「深呼吸して」

「僕は・・・!」

「落ち着いて」

「僕は・・・元大羽中学校生徒です」

「.....！」真希は明らかに驚いていた。

「あの事件の生還者です」

「まさか、噂が本当だつたなんて.....」

「これから話すことは全部真実です」

「話して。あそこで何があつたの?」

「感染と殺戮です」

信一は、立花の事を伏せながら、事件のことを話した。未知のウイルス、感染者、狂暴化、無差別殺戮、学校の秘密、友人の死・・・聞きたかった真希はまだ全てを鵜呑みできなかつた。「まさか.....ね

「今すぐ信じろとは言いませんが、事実です」

真希は眼鏡をはずした。「ちょっとショッキングだね・・・

「ええ、とても」

「私以外に誰か話した?」

「まだ誰も」

真希は一瞬黙り込んだが口を開いた。「なぜ私だけに話したの?」

信一は答えた。「昔の友人に似ていたんです。外見的ではなく中身が。僕の最初の親友で、あの事件で何度も僕達を助けてくれた。けど死んでしまつた.....」

「理由はそれだけ?」

「後、僕に優しく接してくれたから。一番信頼できるから。だから、あなただけに話せたんです」

真希は眼鏡を掛けた。その瞬間チャイムが鳴った。

真希は信一に手を差し出した。「じゃあ、この事は他言無用ですね。

信一君とても易しい声で言つた。

「ええ、そちらもね」

真希は微笑んだ。「改めてよろしく」

「こちらこそ」

信一は手を握つた。

本当に信頼できる、新たな親友ができた。

全てが変わる瞬間

信一は1人で下校していた。真希は生徒会の仕事ですぐには帰つてこない。

今日は妹のお見舞いの日だつた。
確か、俺が東京に引っ越すから、妹も東京の病院に移つたんだよな。
信一は妹の入院している病室に向かつた。
妹は確か個室棟だつたな。

妹の居る部屋に着いた。

「失礼します」

「お兄ちゃん！」ベッドに寝ている茜が出迎えた。

「久しぶりだな信一」信一も居た。

信一は驚いた。まさか信一兄さんも着ていたなんて・・・

「今日は珍しく2人の兄ちゃんが来たね」茜は嬉しそうだつた。
信一はうなずいた。「これで父さんも来れば文句は無いが」
信一も同感だつた。父さんがお見舞いに来たことなんてあつただろ
うか？

3人の家族は楽しい時間を過ごした。

「おつと時間だ。先に帰るよ、茜、信一」

「じゃあね、お兄ちゃん！」

「達者でな」

信一は茜の顔を見た。何と、右目が茶色、左目が青色になつていた。

「どうした？ その目

茜は呆れた。「今頃気づいたの？ 確か、こつこつこ「躓いていた。

信一が変わりに答えた。「虹彩異色症だよ。どうやら遺伝子に異常
が起きたらしい」

信一は別れの挨拶を言つて、病院から出て自宅……ではなく真希の
家に向かつた。

その時、誰かにぶつかつた。

「「めんなさい！」」向こうから謝つてきた。

どこかで聞いたことがある声だ。

信一はぶつかってきた人物の顔を見た。その瞬間、心の奥底から何かが湧いてきた。

「お前は！」信一は思わず言つてしまつた。

向こうも信一の顔を見て驚いた。「信一君……」

「ソフィー！ ソフィーなのか！」

そこに立っていたのは白いワンピースを着ていたソフィー・ヴェルネだつた。以前会つた時よりも肌は白くなつていて、堂々と輝く金髪、青い目、優しい綺麗な顔立ち、間違いない。あの時のソフィーだ。

「やあ！」信一は嬉しさのあまりについつい言つてしまつた。

ソフィーは、嬉涙を流しながら信一に抱きついた。「信一君……会いたかったよ……！」

信一はソフィーの頭を撫でた。

「俺もだ、ソフィー」

2人は近くの喫茶店に入つた。

「本当に久しぶりだな」信一はまだ嬉しさのあまり落ちつかなかつた。

ソフィーもまだ感動していた。「本当にね」

信一は单刀直入に言つた。「てっきりフランスに帰つてたかと」ソフィーは返答に戸惑つた。「えつと、えつと、あの、その、だから、そう…そういう事！」

日本語がめちゃくちゃだ…

「何で前より肌が白いんだ？」

これも戸惑つた。「えつと、美肌あ～～サロン？に通つていたの！」

「うん」

これ以上問いただすのはやめよう。それより今は再会を楽しもう。

「今日はお～るよ。何がいい？」

「とりあえず紅茶」

信一は店員を呼び、紅茶2つとサンドイッチを頼んだ。

信一は紅茶を喉に流し込んだ。なぜ、好きでもない紅茶を頼んだんだろう・・・

「元気だったか？ソフィー」

ソフィーは紅茶を飲みながら答えた。「うん、元気と言えば元気

信一はサンドイッチを一口食べた。

ソフィーは笑みを見せながら聞いた。「信一君？今の学校はどう？

「まあまあだな。でもすぐに1人親友ができた。お前は？」

「わ、私はえつと、その、うん！まあまあ……かな？」

明らかに様子が変だ。まあいか。

「それより信一君！今日は信一君の家に泊めてくれない？」ソフィ

ーは单刀直入に言った。

「お、俺の家？今友人と同居してるんだ

「友人の家でもいい」

「どうしたんだ？」

ソフィーは返答に戸惑った。「い、家出！家出したの！モルモット
みたいな生活に嫌気が刺して」

「友人に聞いてみる」

信一は携帯電話で真希に電話をかけた。

「はい、真希です」

「信一だけど

「どうしたの？信一君？」

「友人がお前の家に泊まりたいって」

「いいよ 1人でも多いほうがにぎやかになるし

「サンキュー」

「ニヤー」

信一は電話を切った。

「じゃあソフィー、うちに……じゃなくて友人の家に行こう

ソフィーは顔を輝かせた。「いいの！？ありがとうー

「

「礼は友人に言つてくれ」

2人は自宅・・・ではなく真希の家に向かつた。

「信一は玄関を開けて、ソフィーを中に招き入れた。

「真希さん居ますか?」

「居るよ」真希の声が2階から聞こえた。

「じゃあ行こう」

信一はソフィーを連れて2階に行つた。

そして、ドアを開いた。

中には真希・・・だけでなく、真人、紀子、真斗、聖夜、トリエン、尾田、綾瀬、武田、立花が居た。

「ごめん・・・ばれちゃつた」真希は左目を閉じながら謝つた。

「どうしたの?信一君?」ソフィーは部屋に入つてきた。

その瞬間、男子達が興奮した。

「この人だ!この人が俺の言つていた美人だ!!」尾田は叫んだ。

「めっちゃ美人だ!!綾瀬以上!」トリエンも言つた。

「んだと!こらあ!」綾瀬はトリエンの後頭部を思いつきり殴つた。

トリエンは気絶した。

「立花ちゃん、久しぶりね」ソフィーは立花に近寄つた。

「久しぶり・・・」立花は表情こそはいつものままだが、心の中では喜んでいた。

「信一君、悪いけど全員私の家の泊まりに來たの」真希は信一のそ
う言つた。

「マジで!?

紀子は信一に近寄つた。「マジよ。中学生男女2人が嫌らしい事しないように監視に來たの。全員ね」

信一は苦笑いした。これはすげえにぎやかになるだろうな・・・

本州生物科学研究所

大澤は不機嫌だった。

「で、保菌者は？」

京子は答えるのをためらった。あの人があくまで眞面目に聞くときは決まってマジ切れしているときだ。

「逃げました。〈2人〉とも」

大澤は近くに落ちていた本を蹴り飛ばした。

「あの、自衛隊と政府に報告はしますか？」

「するわけ無いでしょう！ 無能なのかお前は……」

「すいません！」

大澤は舌打ちした。まさか2人とも逃げたとは……少女のほうは最優先に捕獲しましょう。

全てが変わる瞬間（後書き）

【追加登場人物】

ソフィー・ヴエルネ

大羽中学校封鎖事件の生還者。実は事件中に新種ウイルスに感染したが、事件の犠牲者の1人が完成させていたワクチンのおかげでウイルスに免疫ができ、保菌者になる。度重なる実験の影響で体内色素に異常が発生して、肌が白化する。

全てが変わる瞬間2

この日もいい天気だつた。空は雲ひとつ無く、空気は暖かかった。

信一は2時間目の英語の授業を受けていた。実のところ信一は眠くて眠くて仮眠を取りたかったが、席が一番前のため、寝てしまつたら先生に注意される。だから寝れない。

だが、ソフィーの再会の喜びは今も残つてゐる。だが、それは信一だけではなかつた。

昨日、真希の家で泊まつた男子達は美少女達と一夜を過ごした。皆幸せそうな顔をしていた。

トリエンを除いて トリエンは昨日一晩中氣絶していた。後ろでは真人がノートを書いている 振りをして寝ていた。

よくもまあ堂々とね／＼

右席の真希が話しかけた。

「ごめん、教科書の英文の訳を見せて」「

「・・・今度は立場の逆転だね？」

「だつて英語苦手だもん。それに今日あたるかも」

「はい、訳文を書いたノート」

「ありがとう」

英語の教師である女性が真希に英文の訳を指示した。真希は信一のノートを見ながら訳した。

信一は校庭を眺めた。

授業が終盤に差し掛かつた頃、校庭で何か騒いでいた。校門からフードを被つていた1人の男が入り込んで、校庭で体育の授業でハードルをしていた生徒達に向かつてゆっくり歩いていた。

授業中の生徒達は男に警戒していた。夏場なのに男はトレーニングコートを着ていた。

男が止まると、さらに校門からサングラスをかけた6人の男達が入ってきた。

異常に気づいた女性体育教師が、不審者を追い払うために近寄つていった。

信一はその日なぜか双眼鏡を持っていたため、双眼鏡で男達を見張つた。

「相沢君、相沢君！」英語の教師が注意してきた。

「相沢君こっち向いて！」

「うるさい！！」信一の怒鳴り声には迫力があつたため、先生は信二を恐れた。

生徒達も信一を不審がつた。

「何、あの人？」

「頭おかしいの？」

「気持ち悪」

信一は無視した。異変に気づいた真希と真斗が窓に近づき、外を見た。

窓側の男子達も外を見た。

信一は双眼鏡で男達を見張っていた。

体育教師はフードを被つていた男を説得して学校から出でもらおうとしていた。

フードを被つていた男は数歩下がつて男達の中心に立つた。

信一はサングラスの隙間から男達の目を確認した。

赤目だつた・・・

「先生！逃げて！」信一は思わず叫んだ。

体育教師は信一を見上げた。

その瞬間だつた！

男の1人が奇声を発しながら体育教師の喉元を噛み付いた。

「嘘だろ！！」その状況を見ていた窓側男子達が叫んだ。

校庭から悲鳴が聞こえた。フードを被っていた男以外の男達が奇声を発しながら他の生徒達に襲い掛かった。

真希は英語教師に向かつて叫んだ。「先生！不審者が生徒達を襲っています！警察を呼んでください！」

英語教師は窓から外を見た。「ほんとだわ！」

駆け足で職員室に向かつた。

クラスメート達が窓際に駆け寄つて外を見て、絶句した。生徒達が男達に暴行されていた。いや、厳密に言えば何人かは囁まっていた。

「一体何なのよ！？」

「俺が知るか！？」

「マジでやばいじゃん！」

もはや授業なんて関係なかった。隣のクラスからも驚きの悲鳴が聞こえた。

全教室、廊下に設置されているスピーカーから、教師の声が流れてきた。

『校庭に不審者がいます！全教師は校庭に向かつてください！生徒の皆さんは担任の指示に従つて、速やかに避難して下さい！これは訓練ではありません！繰り返します』

担任の蛇谷がやつて來た。「坂本！お前は皆を体育館まで誘導しろ！俺は不審者の対応にあたる！」

真希はうなずいて、皆に振り向いた。「皆出席番号順に並んで！」

全員パニックを起こして一斉に教室の出入口に駆け寄つた。

信一も廊下に出た。信一の苗字は相沢のため、一番前に並んだ。

「じゃあ、付いて来て！」真希はクラスメートを連れて体育館に向かつた。

体育館に向かう為の出口が見えてきた。他のクラスメートも、信一のクラスメートについて來た。

だが、体育館を繋ぐ出入口に、血まみれの男子生徒が立っていた。

「君！大丈夫？」真希は近寄ろうとした。

「待つてください！」信一は真希を止めた。

「何？」真希は信一に振り向いた。その瞬間、男子男子生徒が奇声を発しながら真希に襲い掛かってきた。信一は男子生徒の顔面を殴つた。そして目を見た。

赤だつた・・・

信一は男子生徒の顎と後頭部を掴んだ。そして180度回転させた。男子生徒の首の肉と皮が引き裂き、骨が飛び出した。生徒達は悲鳴をあげながら、無茶苦茶に散らばった。

真人は信一の肩を掴んだ。「お前！何やつてるんだ！？人殺しだぞ！」

信一は言い返した。「向こうも人殺しだ」

「何を根拠に？」

「前にもこんな事が起きたんだ！」

「前にもつていつだよ！？」

「大羽中学校封鎖事件」

それを言つた瞬間、クラスメート全員の動きが止まり、信一を見た。「俺はあの事件の生存者だ」

真人は信じられなかつた。紀子の推測が正しいなんて紀子は逆に喜んだ。

「あの事件で一体何が？」聖夜は訊ねた。

「殺戮だよ。いいか、皆、荷物をまとめて学校から出る。そして自宅に帰るんだ。渋谷、東京から出るぞ」

誰かが聞き返した。「何でだよ！」

「これは＜感染＞なんだ！！」信一は怒鳴つた。

「感染つて、何の感染だよ！？狂犬病？」

「もつと厄介なウイルスだ。感染者は凶暴化する。感染条件は感染者の唾液と血液が体内に入ることだ。感染拡大を防ぐため恐らく渋谷は封鎖される。悪ければ東京そのものかもな。そうなる前に東京から出るんだ！」

全員、何か言いたがつたが、言えなかつた。「これ以上質問が無ければ家に帰れ！」

信一がそう言つた瞬間、全員玄関に向かつた。
立花が信一に駆け寄つた。「なぜ感染が始まつたの？」

「分からぬ。だが逃げたほうがいい」

信一は、立花と真希を連れて、信一の家に向かつた。

「信一君！ 一体何のウイルスなの？」 真希は走りながら聞いた。

「今だ正式発表されてない新種ウイルスだ！」

信一の家に着いた。3人はすぐに中に入り、玄関の鍵を閉めた。ソフィーがワンピース姿で出迎えた。「どうしたの？ 信一君？」

「<感染者>が現れた」

ソフィーが驚いた。『DEMONYOWイルスの感染者？』

「そうだ」

4人は2階に駆け上がつた。

「マスクは付けたほうがいい！ 経口感染は防げる」

信一はリュックに食料を詰めた。ついでに包丁も持つた。

「信一君、立花が言つた。

「何だ！」

「外に誰かいる・・・」

もしかして感染者か？ 信一はもうひとつ包丁を持って立花に渡した。

「もし感染者が入つてきたら、躊躇わずに殺せ。いいな？」

立花はうなずいた。

信一は包丁を持って、玄関を出た。

その瞬間だつた。

ガスマスクを付けた自衛隊員が信一を取り押さえた。

「何をする！？ やめろ！」

89式小銃を装備した自衛隊員数名が信一の自宅に入つて行つた。真希、立花、ソフィーが連れ出された。自衛隊員の1人が無線で通話した。

「保菌者は無事確保しました」

1機の軍事用ヘリコプターUH-60JA通称ブラックホークが降りてきた。

中から大澤と京子が出てきた。

「お母さん！？」真希が驚いた。

京子も驚いていた。「真希、なぜここに？」

大澤は勝ち誇った足取りでソフィーに近づいた。

大澤はソフィーを睨んだ。「いけない子、家出なんかしちゃ駄目でしょ？」明らかにからかっている口調だ。

「研究所に連れて行つて」

自衛隊員はソフィーを無理やりブラックホークに乗り込ませようとした。

「やめて！放して！信一君！信一君！」ソフィーは抵抗しながら信一に腕を伸ばした。

「ソフィー！」信一も腕を伸ばした。

大澤は信一の腕を無理やり下ろさせた。「僕ちゃんはバスに乗るの・よ・ね」

自衛隊員は近くの停車させていたバスに3人を乗り込ませようとした。

「信一君！…信一君！…」ソフィーはブラックホークに乗らされた。変わりに信一達はバスに乗らされた。バスの前後には軽装甲機動車が、バスの左右には偵察用オートバイに乗った自衛隊員が配備されていた。

「良い旅を」大澤はそう吐き捨てて京子と共にジープに乗った。ブラックホークは離陸し上空へと姿を消した。

軽装甲機動車が動くと同時にバスと定差長オートバイも出発した。バスの中には信一のクラスメートが沢山居た。

真希は真人に話しかけた。

「真人君、一体何が起きているの？」

真人は首を振った。「分からない。突然自衛隊が手当たり次第皆をバスに乗せたんだ」

信一には答えが分かっていた。感染拡大を防ぐための緊急措置だな。
まさに、あの事件と状況が似ていた。
今日はまづい日になるな。

信一達を乗せたバスが、目的地に着いた。

そこは、どこかの高等学校の校庭だった。

校庭には、大きなテントが張つてあり、何かを閉じ込めるように、沢山のフェンスが建つていた。

校舎には、ビニールのようなものが覆わっていた。

ガスマスク、戦闘用防護衣、89式小銃を装備した自衛隊員が信一達をバスから降ろした。

校庭には大勢の一般市民が信一達同様何も聞かされずに強制的に校庭に集められていた。

拡声器を持った自衛隊員が話していた。

「困惑しているのは分かりますが、前の人について行つて検査を受けてください。検査は全部で4つあります。繰り返します

信一たちは言われたとおりに前の人についていくと、テントに向かっていた。

テントの前では、自衛隊が化学剤検知器で市民を検査していた。

尾田が信一には話しかけて来た。「何がおきてるんだ?」

「たぶん、感染者と非感染者を区別しめるための検査だろ」

信一は尾田を見た。何と、赤いコンタクトをはずしていなかつた。馬鹿！はずせ！そう言おうとした瞬間、自衛隊員の1人が尾田を見た。

「感染者だ！感染者出現！」

数人の自衛隊員が尾田を取り押さえた。

「やめてくれ！俺は感染者じゃない！！」

だが、手錠をはめられて、校舎へ連れて行かれた。

信一は同情した。自己責任だけだ。

信一は第1検査を終えた。

今のところ、連れて行かれた知人は尾田だけだ。

テント内に入れられた。テント内は道が2つに分かれていた。

2つの道の前で2人の自衛隊員が市民1人1人の目を何かの形態装置で検査していた。

信一の番が来た。

「異常なし、右に進んで」

信一の知人たちも異常がなかつた。

「異常あり！充血確認！」

トリエンが左の道に強制的に進められた。

「待ってくれ！石鹼が目に入つたんだ！」

トリエンの必死の叫びは誰も聞かなかつた。

信一たちは第3検査の所に向かつた。

そこでは、体温計のような装置を頭に付けて、体温を測定していた。

「……あれは何……？」真斗が信一に尋ねた。

「体温測定だろ？」

「……私、風邪気味なの……」

信一たちの番が来た。信一の体温が測定された。

「平常値、前に進んで」

聖夜と真斗の体温が測定された。

「引っかかった！平常値より高い」

2人が校舎に連れて行かれた。

「待つてくれ！俺バスの中でストレッチしてたんだ！」

「……やめて……！」

信一は自衛隊員に怒鳴つた。

「あの2人は大丈夫です！女子の方は風邪を引いているんです！」

「2人は感染の疑いがある。緊急隔離する」

信一は強制的に前に進められた。

第4検査は唾液検査だつた。

信一が綿棒を口に入れられた。そして、信一の唾液を計測していた。

「陰性、校門に向かつて」

信一の残りの知人も陰性だつた。

だが、見知らぬ幼女から陽性が出た。

「陽性だ！ 感染者だ！」

幼女の母親が抵抗した。

「やめて！ この子は感染していない！ そもそも何の感染なの…？」

無情にも幼女は校舎に連れて行かれた。

「やめて！ 連れて行かないで！ 検査し直して！」

「まあと！ やだ！ 怖いよ！」

全ての検査で異常がなかつた人はカードを渡され校門に進められた。

校門では、沢山の高速バスが停車していた。

「検査で異常がなかつた人たちはバスに乗車してください。ただし、許可証がなければ乗車できません」

なるほど、このカードは許可証か。

だが、信一はまだバスに乗る気はなかつた。

「信一君乗らないの？」 真希は信一に尋ねた。

「ああ、しばらく様子を見てみよう」

信一のクラスメートは全員、バスに乗車した。信一はまだ外に居た。

「検査に引っかかった人はどうなるの？」

「たぶん、隔離されるか、殺されるか」

だがなぜ感染が発生したんだ？ そういえば、自衛隊がソフィーのことを保菌者と言つていたな。

まさか、彼女が？

「信一君、いい加減のろつよ」 真希が話しかけてきた。

「ああ……そうだな」

信一はバスに乗つた。

バスの運転手も自衛隊だった。

席は多いため、信一は座ることができた。

信一が座り込んだ瞬間、1台の大型トラックが信一たちの居るバスの反対の校門から進入し、大勢の市民が閉じ込められているフェンスに突っ込んだ。

フェンスが壊れたことで、市民たちが脱出した。

1人の自衛隊員がバスに乗り込んだ。

「市民が逃げ出した……」

言い終える前に自衛隊員が何かに後ろから襲われた。

目が赤かつた。

「感染者だ！こいつを撃つてくれ！」

運転手の自衛隊員が拳銃で感染者の頭を撃ちぬいた。

よく見ると、トラックが進入してきた校門から、大勢の市民が奇声を発しながら校内に侵入してきた。

「感染者達だ！バスを出せ！」

バスが順に出発した。

校庭に居た自衛隊員たちは、89式小銃で応戦していた。

感染者に襲われた自衛隊員がバスに乗り込み、入り口を閉めた。

「こちら緊急隔離班！隔離は失敗！感染者が多数出現！」

『了解、事態が収集不可能な場合、全隊を撤退せろ』

「了解！交信終了」

自衛隊員は運転手を見た。「発進させろ！」

信一たちの乗つたバスが発進した。

信一は安心と不安の両方を感じた。

隔離された知人たちは無事だろうか？

信一たちを乗せたバスが交差点に差し掛かった瞬間、大きな衝突音と共に、バスが横転した。

大型トラックがバスに突つ込み、衝突を起こした。

中に居た大半の人人が席から放り出された。

信一は、頭を強く打ち、気絶した。

避難用バスが出発する数分前

真斗は目を覚ました。校内の教室だった。

立ち上がろうとしたが、体が動かなかつた。ベルトらしいものでベッドの縛り付けられていた。周りを見てみると、他にもベッドに縛り付けられている人たちが、並ばれていた。自分は一番端だった。何があつたか思い出そうとした。

確かに、体温検査に引っかかつて、そのまま無理やり校内に連れて行かれて、ベッドに寝かされて、防毒服の人たちに人工呼吸器のようなものを口に付けられて……そこで意識が途切れたんだ。

自分の隣を見ると、聖夜が寝かされていた。まだ目を覚ましていない。

「……聖夜君……？」呼んでみても返事がない。当たり前か……よく見ると、防毒服を着た隊員が、1人ずつ血液採取していた。教室の出入り口には、同じく防毒服を着た隊員が89式小銃を装備して、警備していた。

一体何が起きているのか思い出そうとした。

そういうえば、信二君が感染が始まつたと言つていたような……思い出せない。

すると、自動車が走つている音が聞こえた。

聞こえたと思ったら、今度は何かが壊れる音がした。フェンスかな？ 血液採取していた隊員が警備している隊員を見た。

「何があつた？」

「今は関係ありません博士。採取を続けて」

博士は採取を再開した。

今度は銃声が聞こえ始めた。

「一体何が起きてるんだ？」

「今は採取を……」

廊下に居る隊員が騒ぎ出した。

「感染者が襲撃してきた！」

「数は？」

「大勢！」

「退却！総員退却！」

警備していた隊員が博士に怒鳴った。

「感染者が出現した！我々も撤退しよう！」

博士と隊員が廊下に出た。

真斗は首を限界まであげて、窓から外を見た。ここは2階らしいわね。

外では、校庭に止めてある6機ヘリコプターCH-47J/CH-47A愛称チヌークのプロペラが回転し、大勢の自衛隊員がチヌークへ走つていった。

博士が真斗のベッドのそばに無線機を忘れたおかげで、無線機から音声が聞こえた。

『感染者が襲撃。隔離は失敗しました。本隊は撤退を開始します』

『了解、撤退完了後、陸将自らが本作戦の指揮を取る』

『了解』

『全員乗り込みました！』

『了解、離陸する』

チヌークが次々と離陸していった。

『博士が無線機を紛失した、盗聴防止のため周波数を変える』

『了解』

無線機からは雑音しか聞こえなくなつた。

真斗は、隊員が居なくなつたことでベルトをはずそつともがき始めた。

『……駄目か……』

うなり声が聞こえた。聖夜が目を覚ましたようだ。

「うーん、目覚めが悪いな」

「……聖夜君……！」

「黒崎か！良かつた無事だつたかーここはどこだ？」

「……隔離されたみたい……」

「そうか・・・」

聖夜がもがいた。

「くそ！きつくな縛つてるな、誰かの助けが必要だな。そういうえば自衛隊は？」

「……さつき撤退した……」

「撤退？なぜ？」

「……感染者がどうのこうのつて……」

廊下から、何かが引きずられる音が聞こえた。

「誰か来る！」

1人の教師らしい人物が、教室内に入ってきた。

「数学の工藤先生だ！先生！」

同じくベッドに縛り付けられていた少年が大声で呼んだ。真斗のクラスメートの1人だ。

長身の工藤がその生徒の近づいた。

「先生？」

工藤が何かを構えた。スキだつた。

「先生何を！」

工藤はスキを生徒の腹部に突き刺した。

生徒が絶叫を上げた。

「見るな！」

聖夜がそう叫んで顔を襲われている生徒から逸らした。

生徒の腹部に4つの穴が開き、そこから血が流れ出した。

「先生・・・やめてくれ・・・ごふつ」

生徒は血を吐いた。工藤は再びスキを生徒の腹部に突き刺した。スキが刺さる鈍い音と生徒の絶叫が何回か聞こえた。

生徒はすでに死んでいた。

工藤は生徒の隣の男性に近寄った。

男性は目を覚ましていない。

工藤は男性を通り過ぎて、男性の隣の女性に近寄った。

「お願いやめて、助けて助けて助けて

工藤はスキを女性の喉に刺した。声帯をやられ、女性が喋れなくな

つた。

工藤は女性の喉をもう一度スキで刺した。

女性が死ぬまでスキを抜くことはなかつた。

工藤は聖夜に近づいた。

「先生辞めてください！マジで先生辞めたほうがいい！」

工藤はスキを構えた。そして突き刺そうとした。

「止めて——！」

真斗は無我夢中で叫んだ。

工藤は動きを止め、真斗を睨んだ。工藤の目が赤かつた。

工藤は聖夜を殺すのをやめ、今度は真斗を殺そうと近寄つた。

「先生！マジで辞めたほうがいい！俺マジで切れますよ！堪忍袋が切れますよ！」

工藤は聖夜の言葉を無視して、真斗の横に立ち、スキを構えた。

真斗は目を閉じた。どうせ命乞いをしても聞くはずがない。これが運命なら受け入れよう・・・

工藤はスキを真斗の腹部めがけて突いた！

だが、突然工藤が悲鳴を上げた。

工藤の背中に鎌が刺さつていた。

立花が刺していた。

立花は鎌を抜き、今度は後頭部を刺した。

工藤は絶叫を上げて倒れこんだ。

立花は真斗と聖夜を縛っているベルトをはずした。

「たくつ何だよこの糞数学先生が！何人も人を殺しやがつて！

立花は工藤の目を確認した。

「彼はもう普通の人間じやない。感染者になつてた」

聖夜が首を傾げた。「感染者？」

「今朝、信一君が話したでしょ？人を狂暴化させるウイルスが発

生してゐるつて

「じゃあ、工藤が感染してたのか？」

「ええ、この真っ赤に染まつた瞳が感染した証拠」

「詳しいな」

「前にも同じ状況になつたから」

「前にも流行つたのか？」

「大庭中封鎖事件、あれがそうよ」

立花は工藤の後頭部から鎌を抜いた。そして、工藤が所有していたスキを聖夜に渡した。

「これでどうしろつてんだ？」

「感染者が現れたら刺して

「人殺ししろつてか？」

「感染者の会つたら。選択肢は2つ。殺すか、殺されるか

「逃げるつて選択肢は？」

「感染者は疲れ知らずなの。体力に自信があつても、感染者から逃げるのは武器がないときにして」

聖夜は他の人を開放しようとした。

「この人の襲われなかつた人は解放しないで

「なぜ？」

「感染者は感染者を襲わない」

聖夜は舌打ちしながら廊下の出た。

真斗は立花にお礼を言おうと思った。

「……あの、ありがとう……」

「あまりお礼は言わないで・・・いくら感染していても、人殺しをすると、心が穢れていく」

「.....大羽中学校事件で何かあつたの?.....」
立花は返答にためらつた。「好きな人を殺した・・・」

それだけ言つて廊下に出た。

封じ込め作戦

信也は、1つ1つ書類を確認していた。すると、誰かがノックしてきた。

「入れ」

自衛官が中に入ってきた。

「報告します相沢陸将殿。感染が始まりました」

信也はため息をした。

「なぜ今まで黙っていた?」

「その、感染者の緊急隔離だけで事態が収まるかと・・・」

「それで今まで独断で行動していたと?指揮は誰が取っていた?」

自衛官は黙り込んだ。

「誰だ!言え!」

「大澤博士です・・・」

信也は驚いた。

「部外者が指揮を執っていたのか?」

「正確には和田一等陸佐が執っていましたが、大澤博士が和田に指示をしていました」

信也は立ち上がった。

「司令室に向かう。だが無線を貸せ」

自衛官は無線を渡した。

「全隊員に繋がってるか?」

「はい」

信也は喋りだした。

「相沢陸将だ。全隊員に告ぐ。全幹部レベルの者は司令室に向かえ」

「幹部レベルのものは全員指令室にきました」

「全指揮官はロックダウンを確認しろ」

『ロックダウン、確認しました』

信也は司令室に入った。

室内の人は全員立ち上がり、敬礼した。

「東京都内で生物的災害^{バイオハザード}が発生。バイオセーフティーレベル4のウイルスが漏れた」

幹部たちは息を呑んだ。

「感染者の緊急隔離は失敗した。これより緊急軍事機密作戦を実行する」

「了解」

信也は席に座つた。

「全隊を武装せろ」

「了解、全隊に告ぐ。武装せよ」

『了解』

『武装完了しました』

信也はうなずいた。

「全兵器を使用可能にしろ」

『使用可能です』

『全狙撃主^{スナイパー}は出動準備』

『了解』

「政府関係者を避難させよ」

『避難用ヘリが向かいました』

信也はうなずいた。

国会議事堂で大勢の議員が会議をしていた。

だが、ガスマスクをした自衛隊員が議事堂内に入つて会議を中断させた。

「全員、避難用ヘリコプターに乗り込んでください！」

総理大臣が質問した。「一体どうしたんだ？」

「バイオセーフティーレベル4のバイオハザードが発生しました！緊急封じ込め作戦が実行されます！」

それを聞いた瞬間、大勢の議員が議事堂外に待機しているヘリコプ

ターに向かった。

総理は自衛隊員に話しかけた。

「本当に実行されるのか？」

「はい、しかし指揮権はあなたにあります。どうしますか？」

総理は悩んだ。

「指揮は彼に任せよ！」

「なら、早くヘリに乗つて」

総理はヘリコプターに乗つた。

信也は報告を待つた。

「陸将殿、政府関係者の避難が完了しました。指揮権はあなたになると」

信也は満足した。「これからは俺のやり方で進めよ！」

「これより、緊急機密作戦^{「コードレッド」}「封じ込め作戦」を始める。以後、本作戦を暗号名^{「コードレッド」}「真紅計画」と呼称する」

幹部たちは返事にためらつた。「・・・了解」

信也はしばらく黙り込んだ。心の準備が必要だ。

「コードレッドを実行する

「全部隊に告ぐ、「コードレッド」を実行、第1段階に入る。東京を封鎖せよ」

「了解、く壁く」を発動させます

「信一」は目を覚ました。

ベッドの上だ。

「良かつた」目を覚まして

真希がそばに居た。

「つ何があつたんだ?」

「トラックがバスに突っ込んできて、バスが倒れたんだよー・皆パニ
ックを起こして、君は気絶してたんだニーヤ」

頭が痛い。強打したんだな。

信一は部屋を見渡した。真希の家だ。部屋の隅には、自衛隊の89
式小銃1丁と9mm拳銃が2丁、それに携帯無線機があつた。

「あれは?」

「事故が起きた時に自衛隊員2人は死んだんだよ。必要になると思
つて2人から剥ぎ取つた」

信一は不思議に思つた。

「よく1人で運べたな」

「1人じやないよ」

真希の部屋の扉が開いた。

「信一君、目を覚ましたか」

真人だつた。

「君があれを運んだのか?」

「俺だけじやないよ」

担任の蛇谷も居た。

真希が説明した。

「聞いてみれば元自衛隊だつて聞くから、きっと銃の扱いにも慣れ
てると思つて」

なるほど、元自衛隊か。これは強力な戦力になるな。

「しかし驚いたな。自衛隊もあんなに大胆なことをして」蛇谷は渋

い声でそう言った。

「感染拡大防止のためでしおうね、きっと」

蛇谷はしわを寄せた。「感染拡大?」

「DEMON YO^{デモニーヨ}ウイルスが漏れたらんでしょう」

「DEMON YO? タガログ語で悪霊つて意味だな。一体どんなウイルスだ?」

「感染者を狂暴化させるウイルス。感染者は殺人衝動が抑えられなくなつて、他者を襲う」

「空気感染は?」

「接触感染のみです」

蛇谷は安心した。

「だが、よく知つてるね」

真人が信一の代わりに答えた。「大羽中学校封鎖事件もデモニーヨウイルスのせいだつたそうです」

蛇谷はうなずいた。「やはりな、S A Tと自衛隊が出動したんだ。とんでもない事だとは思つたが」

真希は間違えてリモコンを踏みテレビをつけた。

『前代未聞です! 見てください! 東京が、巨大な壁に覆われています!』

全員、テレビに釘付けになつた。

『壁の入り口には自衛隊が検問をしています! 全員ガスマスクをしていて都内で良からぬ事態が起きたと暗示させます!』

チャンネルを次々と変えてみた。

『自衛隊は全員小銃を装備していて、装甲車のようなものも出動しています』

『東京は完全に隔離されました! 一体何が』

『ヘリコプターの立ち入りも許可されず、もしヘリコプターで都内に入れば撃墜すると』

『東京から出るには、埼玉県、千葉県、神奈川県と繋ぐ検問を通るしかなく』

『あの壁がどうやつて現れたか

6

『田撃者によると、壁は地面から生えるように現れると

2

「元自衛隊に聞きたいです。一体なんですか？あの壁は？」

「う・・・そ、うだ！」

蛇谷は無線機を取つた。

連中の周波数を割り出して、情報を聞く。

真希は信一の容態を確認した。

「大丈夫そうね。」

真人は言ふ。聞け。

「なあ、感染した奴が元に戻ることはあるか？」

信一はため息ついた。元に戻るなら、東京は封鎖されないよ……

二二九

「……重臣の間波政が分派して

無線から音声が聞こえてきた。

「バス一台来ていい」

蛇谷は周波数を直した。
「一ノ瀬レジ」

『真紅計画第1段階が実行された。第2段階実行も時間の問題だ』
『感染者の漏れは、

『中止だ。東京そのものを隔離した。都内の隊員は全員撤退した』

『都内のマンホールは?』

『時間が掛かつたが、全て溶接した』
『実戦使用せ?』

『射殺許可が出てる』

真希は首を傾げた。

「「一、二、三、四、五？」

『指揮権は誰に？總理か？』

『相沢信也陸将だ』

「父さん！？」信一は思わず呟いてしまった。

蛇谷が驚いた。『相沢陸将の息子だったのか？』

『でもマジで真紅計画が発動するのか？』

『その言葉、そつくりそのまま返す』

『そろそろ私語を慎もう』

『そうだな、じゃあ周波数を元に戻そう』

『じゃあ、また後で』

雜音しか聞こえなくなつた。

「くそ！私語のための周波数だったか！」

蛇谷は再び自衛隊員が使つてゐる周波数を探した。

信一は真希に聞いた。

「戸締りは？」

「玄関の鍵は閉めたし、1階の窓のシャッターは閉めた」

信一は外を見た。

外は驚くほど静かだ。

真希の携帯電話がなつた。

「もしもし？」

『もしもし真希ちゃん？』

紀子からだ。

「紀子、今どー？」

『学校、既に学校に逃げ込んだの。今は要塞化してゐるわよ。あなた

は？』

『白ヤ』

『白ヤは危険よー。今すぐ学校に着なさい。学校は安全よ。他に誰がいるの？』

『信一君と真人君と蛇谷先生』

『とにかく、学校に着なさい』

電話が切れた。

「紀子が学校に着なさいって」

蛇谷は首を振った。「行動は少人数がいい。多人数では危険が大きくなる」

「どんな危険?」

「感染者に見つかる危険だ。よし、今度こそ「

無線から音声が聞こえた。

『司令部より全部隊へ、司令部より全部隊へ。真紅計画第2段階に入る。狙撃手を感染地に派遣する。狙撃手は狙撃ポイントを確保せよ』

『了解、しかし狙撃対象は?』

『目が赤い人だ』

『了解』

信一は蛇谷に聞いた。

「コードレッドって何ですか?」

「分からん」

信一はため息ついた。これではコードレッドがどんな作戦か分からないな。

すると、1人の小学4年生くらいの少女が入ってきた。

「彼女は?」

「隣の少女。親と喧嘩して家に帰りたくないってうちに来たの」

「ふうん」

その時、外から物音が聞こえた。

信一は隣の家を見ていた。

数人の自衛隊員が隣の家の人を家から出した。

「やめて!なにするの!」

「奥さん落ち着いてください。検査をするだけです」

自衛隊員は体温計のような装置を隣の主婦の頭につけた。

「奥さん、隣の家は住んでいますか?」

「住んでるけど、両親はめったに帰宅しないし、1人娘は今学校に

居ると思つ

「なぜ学校に？」

「学生たちは皆学校に逃げてるって聞いたけど
装置から警告音が聞こえた。

「平常値より高いです！」

自衛隊員が主婦をどこかに連れて行こうとした。

「やめて！検査だけって言つたじゃない！」

少女はその状況を見ていた。

「お母さん！」

信一は少女を抑えた。

「よせ！今言つたら殺されるかもしない！」

すると、隣の家から太つた中学生くらいの少年が奇声を発しながら
自衛隊員に突っ込んできた。

「感染者だ！」

自衛隊員の1人が89式小銃で頭を撃ち抜いた。

「孝太！」

主婦が少年の死体に駆け寄つた。

自衛隊員は主婦を撃つた。

少女は叫ぼうとしたが、信一が口をふさいだ。

自衛隊員がM2火炎放射器で2人の死体を燃やした。

「よし、この地区を終わらせよう。散開！」

自衛隊員が散らばつた。

自衛隊員の1人が真希の家に近寄つた。

鍵が壊れ玄関が開く音が聞こえた。

「丁度いい。1人捕まえれコードレッドについて聞こう

蛇谷が真希の部屋から出た。

そして、自衛隊員を引きずつて入つてきた。

「真希、鍵閉めろ」

真希は部屋の鍵を閉めた。

蛇谷は自衛隊員のマスクとヘルメットをはずさせた。

スポーツ刈りの髪型をした隊員が目を覚ました。
すかさず蛇谷は隊員の首をつかんだ。

「あなたは？」

「お前の運命を決める男だ。妙な真似をしてみる？」この喉笛を潰す
からな」

信一は自衛隊員の89式小銃を持った。かなり重かったが信一は辛
うじて構えられた。

少女は自衛隊員に寄つが真人が止めた。

「よくも兄さんと母さんを！」

「感染者だと思ったんです」

「兄さんは障害者で興奮すると奇声を上げる癖があるのよー。」

蛇谷は聞いた。「なぜ体温を測定する？」

「感染者は非感染者よりも体温が高いと聞いて」

「なぜ射殺した？」

「現状ではワクチンがなく、感染者は治療不可能のため、殺すしか
ないって上から聞いたんです」

「誰の命令だ？」

「分かりません」

「なぜだ！」

「我々の指揮官が誰なのかわかりません。我々は別の命令を受けて
ますから」

「別の命令？」

「コードレッド第2段階が実行される前に保菌者を探せと」

信一は言った。「保菌者ならもう捕まえただろ？」

「保菌者は2人居るんです。もう1人がどこにいるか検討もつかな
い。それに保菌者を乗せたヘリがまだ帰ってきてないし通信が出来
ない」

信一は驚いた。蛇谷は質問を続けた。

「コードレッドって何だ？」

「暗号名・真紅計画の英語呼称。感染地となつた東京を封じ込める

作戦です

「具体的な内容は？」

「分かりません。詳しい内容を聞かされません。ただ発令される命令を実行しようと。具体的な内容を知るのは政府関係者と幹部レベルの自衛官のみです」

すると、真希が蛇谷に言った。「また一人入ってきた

「くそ！」

「なあ、頼める義理はないが、俺を見逃してくれたらあなた達のことは言いません」

真人が抑えながら言った。「先生、こいつはちくります！」

「絶対言いません」

「信じられるか、殺りましょう」

蛇谷は考え込んだ。「いや、開放しよう

「正気ですか？こいつを解放したらちくられる！」

「」のままじや發見される。こいつは喋らない

自衛隊員は小声で言った。「マスクはずしたら死ぬのかな？」

「そう言われたのか？」

「付けとけとしか」

蛇谷は隊員にマスクとヘルメットを渡した。

自衛隊員はそれをつけた。

「銃を返せ」

信一は銃を隊員に渡した。

「かたじけない」

隊員は立ち上がった。「すまないと思つてます

そして部屋から出た。

「誰だ！」

「撃つな！俺だ！」

「感染者は居たか？」

信一たちは緊張した。

「どうだ？」

「影一つありません」

「よし、本隊は撤退を開始している」

2人は去った。

生徒達の国境

「自衛隊の玄関の鍵を壊されちゃつた」
真希はそう呟いた。

「これからどうします？先生」眞人は皮肉っぽく言った。
蛇谷が考え込んだ。

「学校へ行きましょう」信一はそう提案した。
「駄目だ、数が多いと危険も大きくなる」
「ですが、戦力も大きい」

蛇谷は何か言いたかつたが、信一の提案を呑んだ。
「分かつた。ここよりは少し安全だな」

蛇谷は部屋の隅に置いてあつた89式小銃を取つた。

「予備の弾倉は？」

「机の上に」

蛇谷は9mm拳銃を信一と眞人に渡した。

「まともには使えないと思うが念のためだ」

2人に2つずつ予備の弾倉を渡した。

「眞希は無線を持つてくれ」

蛇谷は眞希に無線機を渡した。

眞希は包丁を持った。

「それじゃ、いくぞ」

蛇谷は先頭に立ち、家から出た。

「大丈夫だ、行こう」

信一は蛇谷の見事なステルス行動に感心した。さすがは元自衛隊な
だけある。

蛇谷は小銃を構えながら歩いていた。

「無線機から音声が聞こえた。」

「全狙撃手は狙撃地点に着きました。狙撃対象は？」
〔ナイバ〕

『赤目の奴らだ。外に出てる赤目は撃て。テレビやラジオで外出禁

止令を出した。外出している奴は少ないだろ』

『了解』

蛇谷は壁には張り付いた。

「壁に張り付きながら、姿勢を低くしろ」

蛇谷はほとんど音を立てずに歩いた。信一たちも姿勢を低くしながら歩いた。

「待て！」

蛇谷は4階建ての建物の屋上に指を刺した。

「あそこに狙撃手が居る」

そういうながら、信一たちを誰かの家の塀の入り口に入れさせた。

「そこに隠れろ」

そう言って、蛇谷も塀の入り口に隠れ、小銃を構えた。

信一は顔を出して様子を見た。

1人の男が歩いていた。

目は普通だ。非感染者だな！

「先生、一般市民です」

「分かつてると、大声を出すとこちらの位置を悟られる」

男が歩いていると、銃声が鳴り響いた。男の頭が撃ち抜かれた。

「くそ！ 感染者と間違いやがったな！」

また銃声が鳴り響いた。今度は蛇谷たちの隠れている塀に当たった。

「くそ！ あいつ感染者と非感染者の見分けが付かないのか？」

蛇谷は白旗を出し、塀から出して振った。

2発の銃声が鳴り響き、塀の当たった。

「どうやら、あいつ見分けなんて始めるしてないようだな。相沢、あいつ今何発撃つた？」

「たぶん、4発」

「よし」

蛇谷はまた白旗を出した。銃声が鳴り響いた。

蛇谷はすかさず小銃を構え、狙いを定めて1発撃つた。

「双眼鏡あるか？」

信一は双眼鏡を渡した。

蛇谷は双眼鏡で確認した。

「死んだぞ、安全だ」

信一は一安心した。真人は小声で怒鳴った。「殺したんですか！」

「障害になるからだ」

「だからって」

「正当防衛だ。それにあいつだって人を殺した」
真人はそれ以上言わなかつた。

「もうすぐ学校に着くぞ」

信一たちの通う学校が見えてきた。

よく見ると、1階の窓ガラス部分が板で打ち付けられていた。

「窓が木の板で塞がつてゐるな」

「玄関は？」

「玄関の窓部分も板で塞がつてゐる」

信一たちは玄関に近づいた。

「おや？開いてるな」

信一たちは玄関から校内に入った。

すると、バッド、ラケット、包丁などを構えた生徒、職員が信一たちを囲んだ。

「これつて、外の方が安全ジャン」真希がさりげなく呟いた。
紀子が来た。

「彼らは大丈夫よ」

全員、武器を下ろした。

真人が近づいた。「お前がリーダーか？」

「まあ、実質的にはね」

蛇谷が聞いた。「ここを要塞にしてるのか？」

「ええ。トイレもあるし、レトルト食品もあるし、非常用食料もあるし、水もあるし」

レトルト食品と非常用食料はまとめて食料つて言え。信一はそう思

つた。

「ここは安全よ」

信一たちは2階の自分たちの教室に入った。

クラスメート全員居た。尾田を除いて……

「尾田君は？」

「…殺された…感染者として…」

信一は同情はしたが、自業自得だと思った。

真人と紀子は第1校長室に向かつた。

ドアをノックした。

「合言葉は？」中から声が聞こえた。

「猫耳最高」

ドアが開いた。

中には狐狩りの幹部メンバーが居た。

「何のようだ？」液田井……ではなく総督が聞いた。

「暇だから来たのよ」

真人はメンバーの装備を見た。

総督は無装備だな。いや、よく見れば棘付きメリケンサックを付けている。

雑賀は大鎌を持っていた。

蛸田は斧を持っている。

須田は弓矢を装備している。

鳥山は巨大な丸太を装備している。

猫野は本物の回転式拳銃だ。

「マジで怖い集団だな」

真人はそう言つた。

メリケンサックは分かるが、斧、大鎌、弓矢、拳銃はすごすぎだろ！

「狐狩りの全勢力をここに集結させたから安全だ」総督は断言した。

「変質者など我々の敵ではない」雑賀はガスマスクの呼吸音交じりで言つた。

「私の弓の腕はスナイパー並みだよ」須田は自信ありげに言った。

「私たちのところに居れば安全だ」蛸田が言った。

「はつはつは！まさに特殊部隊だ！」鳥山がそう言った。

「くくく・・・私が一番助かるけどね」猫野が言った。

確かに校長室に居れば安全かもな。そういえば、校長室の前で大勢の不良集団が金属バットやメリケンサックやハリセンなどを持つて警備してたな。

「友人たちを連れてここに来るといい」総督は言った。

「大事なお客さんだからね」須田は惑わすような声で言った。

「はつはつは！まさに用心棒」鳥山は笑いながら言った。

「くくく・・・どう痛めつけてやろうか？」猫田は論外。

真人は友人たちを連れて行くことにした。

こいつら、案外良い奴らだな。

信一は立花の隣に座つた。立花は血まみれの鎌を持っていた。
「殺したのか？」

「うん」立花は悲しげに言った。

「当然だよな。感染者とはいえ、人を殺したからな。しかも前の事件で友人を殺したからな・・・」

信一は立花が十字架のネックレスをつけていることを気づいた。

「それ、紘輝のか？」

「・・・ええ・・・」

「唯一の形見か」

「・・・ええ・・・」

紘輝・・・彼を思い出した瞬間、2人は悲しみが込み上げた。

信一の友人たちの中でも感染者と勇敢に戦い、感染者になった男。そして、立花の手で殺された男。

「あいつの話題はやめよう」

「いいの。彼は私を何度も救つてくれたから」

「でも悲しくなるだろ？」

「・・・うん・・・」

信一は頭を撫でた。

「あいつの唯一の形見は大事にしろ」

「・・・うん・・・」

信一は立ち去つた。

すると、2人の中学生の兄と小学5年生くらい妹が階段で話していた。

「兄ちゃんが守つてやるからな」

「でも・・・」

「大丈夫だ」

真希と蛇谷がやつて來た。

「どうしたの?」

妹が真希に言つた。「兄ちゃんが怪我してるの

「どんな怪我」

「お父さんに肩を噛まれたの」

信一が驚いた。「お父さんはどうやって噛んだ?」

「わめきながら」

信一はゆっくり座つた。言いたくないが、仕方がない。

「お兄さん、残念ですが、あなたは感染してます」

兄が驚いた。「一体何に?」

「人を狂暴化させるウイルスに」

「嘘よ!嘘よ!」妹が兄に抱きついた。

「発症したら、俺は父さんみたいに人を襲うのか

「残念ですが・・・」

「嘘よ!」

妹は泣き始めた。

兄は眼から涙を流した。「もし俺が死ねば、妹は家族を全員失う

兄は信一を見た。

「感染は確実か?」

真希は否定した。「確実のはずじやない

「いや、確実だ」

信一は半ば同情していた。

「感染した人は短期間で発症して、親しかった友人や家族を襲う。噛むだけで感染する」

兄は妹の頭を撫でた。

「これが現実です」

兄は信一を見た。

「妹を頼む」

「お兄ちゃんの嘘つき！」

妹はどこかへ走り去った。

真希は妹を追いかけた。

兄は泣き出した。だが、すぐに泣き止んだ。

「人生は・・・死ぬその瞬間まで・・・愛しい」

信一はうなずいた。

「ろくな成果を出せずにこの世に去るのか・・・」

信一はうなずいた。

「生きることは・・・素晴らしい・・・そう思わないか？」

信一は黙つてうなずいた。

「妹を守ってくれ」

そして兄は下を向いた。

蛇谷は信一をどこかへ向かわせた。

「名前は？」

兄は答えなかつた。

顔を上げた瞬間、兄の眼は真つ赤に染まつていた。

「許せよ」

蛇谷は小銃を構えた。

兄が奇声を発しながら蛇谷に向かつて走つた。

1発の銃声が鳴り響いた

選別不能（前書き）

【追加登場人物】

相沢信也

信一、信一、茜の実の父親。陸上自衛隊に入隊しており、階級は陸

将。冷静冷酷。

織部直人

陸上自衛隊天才狙撃手。階級は1等陸曹。

山根冬樹

陸上自衛隊ヘリコプターパイロット。専用ヘリはニンジャ。

選別不能

織部直人は、20階建てマンションの屋上から対人狙撃銃レミトンM24SWSのライフルスコープで地上を覗いていた。

『まったく、つまらない戦闘だぜ』

同僚の声が無線から流れた。

『かつたるい訓練よりましたろ?』

直人はそう返事した。

『だけどよ、ずっと狙撃銃^{スナイパーライフル}で地上を見張つてると、訓練の方がましに思えてくる』

いつもは、訓練よりじつとしてるほうがいって言つてるのにな……

『そんなに敵がほしいなら、俺の場所の正面にあるマンション13階の一一番端の部屋を見ろよ』

しばらく沈黙が続く。

『あのデブオナリーしてやがる!』

無線から同僚の声が響いた。

すると、別の同僚の声が流れた。『マジかよ、俺達が汗流して皆から狂暴な男達から街を守つてるのにね』

また別の声が。『なら、あのデブの1発撃ちこみましょうか?』

『よせよ、裁判所に送られるぞ』

『心配しないでください先輩。凄腕弁護士を雇いますから』

『そんな金あるのかよ?』

『おい皆、また外出している奴が居る』

『どこだ?』

『直人のマンションから見て、12時の方向の駐車所に止めてある車に隠れている』

直人は面倒くさそうに見た。確かに男が居た。

『本當だな』

『ちゃんとテレビとラジオで外出禁止令を出したから、あいつは感

『染者だな』

『直人、お前の獲物だ。手柄は譲るよ』

直人はスコープで外出者の顔を見た。普通の顔だ。

『あいつは感染者じゃない。撃つたら裁判所行きだ』

『マジかよ！未感染者かよ！つまんね～な！』

『お前は人を殺したいのか？』

『先輩、悪趣味ですね』

『うるせー！！』

直人は呆れて笑った。

『1発脅してみるか？』

『おう、やつてくれ』

直人は1発撃つた。銃弾は男の足元のコンクリートに当たった。男は一目散にどこかへ逃げた。

『ははは！あいつだせ〜』

『確かに今の逃げる姿は傑作だな』

『吹いてしまいました』

すると、また別の声が聞こえた。

『よう、直人。お前が良く見えるぜ』

『山根か！今どこだ？』

『上を見ろ』

上空を見ると、UH-60JA愛称ブラックホークが飛んでいた。

『お前の愛車は今日も元気だな』

『ああ、このプロペラが人を切り裂きたいって俺に泣き叫んでるぜ』

『こえ〜』

『てか、どうやつて引き裂くんだ？』

『やろうと思えば出来るんじゃないですか？』

直人は苦笑いした。だが、さつきから不思議に思うのだが、なぜ、ずっとこの地区は沈黙を守っているのだ？不気味なくらい静かだ。

『そついえば……』

『どうした、山根？』

『どうした、山根？』

『大勢の市民がどこかの小学校の体育館に逃げ込んだつてな』

「今は関係なし」

直人は狙撃銃で正面のマンショングループの一部屋一部屋を覗いた。

この部屋は留守かな？

お、隣の部屋は若い男女が熱い性交をしてるな。

隣は勉強中。

その隣は着替えている。スカートを脱ぎ、下着姿だ。ブラジャーをはずそうとしてる。早く！早く！

だが、直人は覗くをやめた。かわいそうだ。そつとしておこう・・・すると、無線から焦った同僚の声が聞こえた。

『おい皆！大勢の市民が走ってくる！』

同僚の言つとおり、大勢の市民が無茶苦茶に逃げていた。よく見ると、血まみれの市民も何人か居た。

『みんな聞け！市民が避難していたどこかの体育館で感染者が出てきたらしい！』

無線から、司令部の男の声が流れた。

『全狙撃手に告ぐ！真紅計画第2段階実行だ！感染者のみを狙撃しろ！非感染者や味方は撃つな！』

直人は狙撃銃を構えた。

大勢の市民の中から、田の赤い市民を見つけた。そして、狙いを定め、引き金を引いた。

銃声が響くと共に、感染者の頭部から血と肉片が飛び散った。

「1人射殺」

他の狙撃手も銃撃を開始した。

『2名殺した！』

『こつちは3人だ！』

『4名射殺』

『まだまだ獲物は沢山居るぜ！』

『いいから撃て！』

直人は2人目の感染者を見つけた。そして撃ち殺した。

「2人射殺」

『5名射殺!』

『先輩! あなたは未感染者を撃つたんですよ…』

銃声が少なくなってきた。

『くそ! どれが感染者か分からん!』

『早く撃て! 感染者が増えてるぞ!』

大勢の狙撃手は撃ちまくつた。だが、撃たれた市民の中には、未感染者が紛れていた…

作戦司令部にて信也は狙撃手の会話を聞いていた。

『誰が感染者だ!』

『市民が多すぎる!』

『駄目だ! 狙いが定まらない!』

司令部のモニターに、街中の監視カメラの映像が流れてきた。映像には、逃げ惑う人々と感染者が映っていたが、どれが感染者か見分けが付かなかつた。

『全狙撃手、なぜ発砲しない?』

『どれが感染者か分かりません!』

選別が困難になっているのか…なら、こうじつときのための措置は1つ…

信也は口を開いた。

「総員に通達せよ、目標の選別を中止。地上の全市民が目標だ」現地隊員に指示を出す自衛官が困惑した。「それって、あの…」信也は冷静な声で言った。「もう一度言つ。選別中止。全市民を射殺せよ」

「それって、あの…」

「もう一度言つ。選別中止。全市民を射殺せよ」

「それって、あの…」

「早くしろ…」

「り、了解!」

自衛官はマイクを握った。

信也はその様子に満足した。

『全狙撃手に通達。目標の選別を中止、地上レベルの全市民を射殺せよ』

直人は耳を疑つた。選別中止つて、まさか・・・

「もう一度お願ひします」

『繰り返す！地上の全市民が目標だ！例外はなしだ！繰り返す！例外はなしだ！』

「それって無差別発砲じゃないか！！」

直人は狙撃銃を構えた。俺は目標を選別する！

だが、市民が多すぎて、感染者が見つからなかつた。

同僚の声が無線から流れた。

『直人！なぜ撃たない！無差別発砲しようと命令されたろ！？』

『俺達は自衛隊だ！軍隊じゃない！』

『甘つたれるな！こつちの命が危ない！』

直人を除く全狙撃手が発砲を始めた。

直人は感染者を発見した。

「見つけたぜ」

感染者を射殺した。

逃げ惑う女性が見えた。何してる？早く逃げろ！そう心の中で叫んだ。

だが、女性の後頭部から血が噴出した。
直人は驚いた。

何してんのだ！彼女は感染者じゃないんだぞ！

よく見ると、感染者、非感染者関係なく、次々と人が撃たれている。

直人はスコープで感染者を探した。

すると、1人の幼女が見えた。制服を着ているから幼稚園児だな。
幼女は自分の家族を探しているかのように彷徨つていた。

幼女めがけて感染者2人が走つていた。

危ない！そう思つた直人は反射的に引き金を引いた。1人死んだ。

もう1人も即座に射殺した。

直人は狙撃銃で幼女を探した。

「居た！」

幼女を発見した。

と同時に幼女の頭が撃ちぬかれた。

直人は思わずスコープから目を離した。

地上では、銃声と共に次々と市民が射殺されていた。

まるで戦争のように・・・

『本部！本部！俺は弾薬が尽きそうだ！』

『弾丸が持たない！』

『市民が多すぎる！』

『了解、GH-47JJ/JJAを飛ばす。撤退の準備をしろ』

撤退用のチヌークが来るつて？

数分しないうちに6機のチヌークが飛んできた。

『こちらチヌークパイロット。着陸の場所を確保してほしい』

『了解、では広場の感染者を射殺する』

銃声と共に、マンショーンとマンショーンの間にある広場の市民が射殺されていった。

『こちらチヌーク。着陸する』

チヌークは着陸し後ろのハッチが開いた。

狙撃手達が次々とチヌークに乗り込んだ。

『これで全員か？』

『まだ1人足りない』

『直人！返事しろ！直人！』

直人はあえて返信ボタンを押さなかつた。

『まずい！市民の軍勢が来る！離陸しろ！』

チヌークは離陸し、上空へと飛んだ。

真人は、目の前に広がる死体の山を見て絶句していた。

『畜生！何が自衛隊だ！そこらの軍隊と変わらないじゃないか！』

「これが本当に日本か！！」

すると、1人の少女が目に入った。白いワンピース姿の少女。何かを求めるかのように走っていた。

「…………美人だな…………」

真人は屋上から1階に降りようと、エレベーターに乗った。まだ生存者は大勢居るはずだ。彼らを見殺しには出来ない。そう思つて、彼は生存者を求めて1階を押した。

「負傷死者は？」信也は自衛官に尋ねた。

「行方不明者が1人」

「誰か分かるか？」

「織部直人1等陸曹です」

信也は少し失望した。彼はかなりの天才狙撃手だ。彼を失つたことは大きい。

「まあいい。真紅計画第3段階実行の準備をしろ」

信一は玄関を開けようとした。

「どこへ行くの？」

立花がいつの間にか後ろに居た。

「……病院……だけど？」

「じゃあ、私も行く」

信一は驚いた。

「危ないぜ、外は感染者だらけだ」

「感染者なら、嫌つてほど会つたから」

信一は困つた。こいつは案外頑固だからな。

「よ、お二人さん」

2人は声の主を見た。真人だった。

「2人でどこへ行くんだ？」

「病院」

「丁度いい、実は俺達も病院へ行く必要があるんだ」

信一は驚いた。

「どういう意味だ？」

「実はクラスメートの何人かが高熱を出して、この学校の保健室には薬がないからね」

なるほどね。

「なら、俺が行くついでにとつてきますよ」

「1人じゃ危険だ。1人より2人。2人より3人の方が心強い」

「でも……」

「大丈夫だ。足手まといにはならない」

信一は立花を見た。

「どう思う？」

「彼の言い分にも一理あるわ」

信一は決心した。

「分かりました。けど、僕は足手まといだと思つたら捨てますから」「上等だ」

3人は玄関を出て、校門を通つた。

外は驚くほど沈黙を守つてゐる。

「静かだな」信一はつぶやいた。

「感染者が全員殺されたのかしら?」

「あるいは狙撃手が全員死んだか」

信一は歩き始めた。

「どこの病院に行くんだよ?」

「黙つて付いて來い」

2人は信一に付いていった。

それにしても本当に静かだ。嵐の前の静けさか? だが、沈黙を破る声が聞こえた。

この声は老婆か?

信一は、声のする方向を向いた。

1人の老婆が、自宅の玄関の前をほおきで掃いていた。

「幸せは〜歩いてこない だ〜から、歩いてゆくんだね〜」

信一は信じられなかつた。この老婆正氣か?

「2人との隠れてろ」

2人は近くに停車していたワゴン車と壁の間に隠れた。信一は老婆に近づいた。

「おばあさん、何してるんですか?」

「何つて、見てのとおり掃除だよ!」老婆は大声で怒鳴つた。

「おばあさん落ち着いて! 大きな声を出さないで!」

「つるさい! 掃除の邪魔をするな!」

老婆は、ほうきで信一を叩いた。

「おばさんやめて!」

その時、恐ろしい奇声が聞こえた。

信一は奇声のする方向を向いた。

感染者7人が奇声を発しながら走つてきた。

信一は玄関のドアが開いていることに気づいた。

「2人もとも！ 来い！」

2人は玄関から老婆の家に入った。

信一もドアの前に立つた。

「おばあさん！ 早く入つて！」

老婆は鼻歌しながらほうきを掃いた。信一は老婆を連れ込もうとしたが、もう目の前まで来ていた。

信一はすぐに玄関のドアを閉めた。そして、覗き穴で外の様子を見た。

感染者が老婆を取り囮んで殴る、蹴るなどの暴行をしていた。

「あんた達！ 何様のつもりだい？ やめなさい！ やめて！ やめておくれ！」

倒れこんだ老婆をまだ感染者は蹴っていた。

そして、1人の感染者が老婆に乗っかり、首筋を噛み付いた。

老婆は絶叫を上げた。

感染者達はドアを向いて、体当たりを始めた。

信一はドアの鍵を閉め、チエーンをかけた。

階段を駆け上がり、2階の部屋に入った。

部屋には2人が居た。

信一は部屋のドアを閉めて、鍵を閉めた。

「信一君どうしたの！？」

「感染者だ！」

「数は？」

「7人」

信一は、ドアの横に棚があることを気づいた。タンスを倒し、ドアのバリケードにした。

何分経つただろうか・・・

玄関を叩く音が聞こえなくなつた。

「あきらめて帰つてくれたかな？」

信一は、タンスをドアから退け、廊下に出た。

「もう安全だ」

2人はほっとした。

信一は、部屋の横にもう一つ部屋があることに気づいた。

その部屋のドアを開けてみた。

部屋の真ん中に、少年が椅子に縛られていた。

「大丈夫か！」

信一が駆け寄つてみると、少年が顔を上げた。目は赤かった。

少年の足元に、ノートが落ちていた。

小学2年生。俺より年下じゃないか。

少年は奇声を発した。

なるほど、状況が読めた。こいつは、あの婆さんの孫か何かで、孫が感染したことで、発狂したんだ。

信一は、静かに部屋を出て、ドアを閉めた。

2人は、庭の物置に居た。

「すげーな、これ」真人はナタを出した。

立花は、アイスピックを取り出した。

信一が、物置に着いた。物置の中には、斧や鋤やなどがあった。

信一は斧だけをもらつた。

立花は、リュックに缶詰などの食料を詰めていた。

信一は、包丁をベルトに挟んだ。「じゃあ、そろそろ行くぞ」

そう言って玄関に出た。玄関前では、老婆が首から大量の血を流して死んでいた。

真人と立花が後から出てきた。

「じゃあ、行こうぜ」真人は陽気言つた。

緊張感のない奴だな。頼りになるだろうか？

信一達は、目的地である病院に着いた。

「不思議だな」

「何が？」

「ここまで来るのに感染者と一緒に出合わなかつた「運が良いな」

「そういう問題かな？」

「信一は2人を向いた。「じゃあ、2人は薬を集めて」

「あなたは？」

「病院内を探索してくる」

信一はそう言つて、個室棟に向かつた。

そして、ある病室に入った。

病室内には誰も居なかつた。

「やつぱりな」

信一はそう言つて、病室を出よつとした。だが、物音がした。

信一は振り向いた。ベッドの下から何かが這い出ってきた。

「お兄ちゃん！」

茜だつた。

「茜一」

信一は茜をベッドに寝かせた。

「どうしてまだここに？」

「変な兵隊さんが皆を連れて行くから、怖くなつてベッドの下に隠れたの」

安心するべきだか、しないべきだか？

「歩けるか？」

茜は立ち上がりうとしたが、すぐに倒れた。

「いつもベッドに寝てたからな」

信一は、茜を抱きかかえた。廊下を出ると、車椅子が丁度目の前にあつた。

「こいつはありがたい」

「うん」

信一は茜を車椅子に座らせた。

「じゃあ、行くぞ」

そう言つて車椅子を押した。

しかし、自衛隊の連行に逃れたことで安否の確認が出来たのは安心できたが、危険極まりない街に残されたことで余計心配だな。複雑な気分だ。

2人がやつて來た。

「信一、そいつ誰だ?」

「俺の妹だ」

「これが、病院に行きたがつていた理由ね」

「相沢茜です。よろしくお願ひします」

茜は礼儀正しく挨拶した。

「自己紹介する状況じゃないが、俺は安藤真人」

「立花裕香、よろしくね」

「じゃあ、学校に」

信一が言い終える前に、何か鉄のような物を引きずる音がした。

廊下の奥からだ。

音が段々近づいてくる。

3人は武器を構えた。

音の正体が現した。

つるはしだつた。つるはしを持つた少年・・・と思つ人物が信一達に近寄つた。

夏用のポールシャツを着て、黒い制服のズボンを履き、頭を包帯で肌を露出しないくらいに巻いていた。

「何だよ・・・あいつ」真人はつぶやいた。

つるはしを持つた少年が、人間か感染者か分からぬ中途半端な奇声を上げながら、信一達に向かつて走つた。

発狂者

包帯で顔を隠した少年が、つるはしを振り回しながら、信一達に走つていった。感染者なのか、未感染者なのか判断が出来ない中途半端な奇声を発しながら。

信一は斧を構えた。

「逃げろ！！」信一は叫んだ。

と、同時に少年はつるはしを横向きに振り回した。信一は反射的に頭を下げた。

つるはしの先が信一の髪の毛をかすつた。

が、少年は右足で信一を蹴り上げた。

信一は倒れてしまった。そして、つるはしを振り上げた。

まずい！信一は心の中で叫んだ。

真人が、少年を羽交い締めで抑えた。

「畜生！お前は感染者なのか！？」

真人は叫んだ。どうやら感染者なのか分からぬようだ。

少年は後頭部で真人の顔を頭突きした。

真人は怯み、少年を解放してしまった。

少年はつるはしを無茶苦茶に振り回した。

「危なつ！」真人は避け続けた。

「くそ！持たない！」もう駄目だ！おしまいだ！

そう思つた瞬間、少年が突然倒れた。

よく見ると、右脚に鎌が刺さっていた。

「早く逃げて！」立花が少年の脚に投げたのだ。

信一と真人は走り出した。立花は茜の車椅子を押しながら走つた。

「エレベーターだ！乗ろう！」信一はエレベーターのボタンを押し、扉が開いた。

全員エレベーターに乗り込んだことを確認すると、すぐに1階を押した。

扉が閉まり、全員、一安心した。

「しかし、あいつは感染者だったのか？」真人は信一に尋ねた。

「分からぬ。中途半端な奇声だったから」

「でも、暴れるだけの無能には見えなかつたな」

「これから彼をどう呼ぶの？」立花はそう言った。

真人は悩んだ。「ううん、いつそ、半端野郎つてのは？」

「包帯男」茜がさり気なく言つた。

信一は意見をまとめた。「分かつた。あいつを感染者じゃないことを前提して、妨害者と呼ぼう」

エレベーターの扉が開いた。

信一達は病院から出ようとした。

が、病院入り口のシャッターが閉まつていた。

「これからどうする？」

「裏口があるはずだから、そこから出よう」

信一達は裏口に出ようと振り向いた瞬間、立花の頭に何か横切つた。さつき立花が投げた鎌だった。

信一達の目の前に、妨害者が居た。

「くそ！あいつの横を走れ！」信一は叫ぶと同時に、斧で妨害者の頭を割ろうとした。

妨害者はつるはしで、それを防いだ。真人はその隙に、妨害者の横腹をナタで切ろうとした。

妨害者は素手でナタの刃を握り、受け止めた。

立花は、茜の車椅子を押して、妨害者の横を通りうとした。

妨害者は、車椅子を蹴つた。

茜が車椅子から落ちた。

「茜！」

信一は茜のもとに駆け寄ろうとしたが、妨害者はつるはしで信一の足を引っ掛けた。

信一は倒れてしまった。

真人はナタで足を切ろうとした。だが、また刃を握られて失敗した。

立花は茜を車椅子に座らせて、再び押した。

信一の後に続いた。真人は妨害者の頭を右手で1発殴りつけた。妨害者は倒れこんだ。

信一達は、受付を飛び越えて、職員たちの待機室に入った。そして、裏口が見えた。

「やつた！」

信一がそう言つて裏口を空けた瞬間、白衣を着た男性感染者が信一に掴み掛かった。

「畜生！」信一は感染者の腹を力いっぱい蹴りつけた。感染者は外に飛ばされた。信一は裏口を閉め、鍵を掛けた。来た道を引き返そうとしたが、妨害者が走ってきた。信一は待機室の扉を閉めた。

妨害者は木造の扉をつるはしで壊し始めた。

「どうするの！？」立花は信一に聞いた。

「立花は茜を頼む。真人」信一と真人は、武器を構えて女子2人の前に立つた。

妨害者は扉を破壊し、室内に入った。

同時に感染者も裏口の鍵を壊し、室内に入った。

感染者は、信一達ではなく、妨害者に向かつて恐ろしい奇声を發しながら走つた。

妨害者は感染者の右足をつるはしで刺した。

感染者は一瞬怯んだが、妨害者のつるはしを奪い、投げ捨て、掴み掛けた。

妨害者も感染者に掴み掛かつた。

あいつは感染者じゃなかつたのか！信一は瞬時に理解した。

信一は感染者が破壊した裏口から外に出ようとした。

だが、複数の感染者が外に待機していた。

信一は裏口では脱出できないと判断し、来た道を引き返した。

感染者と妨害者が、まだ掴み合いをしていた。

信一達は、またホールに出た。出入り口では、やはりシャッターが

閉まっていた。

見渡すと、階段も防災シャッターが降りていて、通行不可能だ。
馬鹿な！来た時には下がってなかつたのに！
感染者達が院内に侵入してきた。信一は3人を連れてエレベーターに乗つた。適当にボタンを押し、扉を閉めさせた。

信一は、エレベーターという、聖地に居ることを確認した。
真人は震えていた。「あいつ、感染してなかつたのか」

「でも、なぜ私たちを襲つたの？」

「さあな、発狂したんじやないか？」

発狂……そういえば、あの老婆も発狂していたな。

極限の絶望や失望感で都内で精神がおかしくなつた奴らがいるのか？
発狂者達クレイジーズ、いかれたもの達、つまり、あの少年も発狂者達の一人で、
殺人鬼になつてしまつたのか？なら、都内にはもっと発狂者達が居るはずだ。厄介だな……

「で、どうする？1階は感染者に制圧されたぞ？」

「非常階段を使う」信一の答えは早かつた。

「なるほどね」

エレベーターの扉が開いた。

「よし、さつさとこの糞忌々しい病院から出よつ

畠子（前書き）

これまでの発狂者 クレイジーズ

老婆

孫が感染したことで発狂。 感染者に殺害される。

妨害者

正体不明の殺人鬼少年。顔を包帯で隠し、つるはしで信一達を殺そ
うとしたが、感染者に襲われ、生死不明。

「畜生！暗いな！」

信一達は、5階の廊下に居た。懐中電灯がなければ、進めない暗さだ。それに殺風景だ。幸い、信一達は懐中電灯を持参していた。茜には、廊下にあつた非常用懐中電灯を渡した。

いくつもの病室の扉が閉まっていた。どれも、窓部分に鉄格子が取り付けられていて、まるで重大犯罪者が閉じ込められているようだ。ここは明らかに危険な患者と閉じ込めるための階だつた。

狭い廊下だつたが、エレベーターのすぐ横に、オフィスと書かれた部屋があつた。

中は意外に広く、大量の資料が散らばっていた。

机の上には、パソコンが置いてあり、画面には1部屋1部屋の映像が映つっていた。

部屋の中心にあるテーブルに1つのファイルが置いてあつた。

立花はファイルを取つた。

「読んでくれ」

立花はファイルを読み始めた。

「鬼塚亞矢子12歳。心臓を患つたため緊急入院。心臓移植後、症状は良くなつていつたが、人形などの破壊行為、他者をおもちゃと見なす精神、他者を傷つけることに喜びを感じる等、精神的に問題が発生、緊急隔離の措置を取つた。なお、15歳未満の入院患者を見せたところ、3人の少女を気に入つた。1人目は足立良子、壊し甲斐ある、2人目は小野翼、彼は脳に障害を持つてゐるため、彼のリアクションが受けるなどの問題発言した。3人目は相沢茜、先の2人と違い、彼女との面識はないと判明。気に入つた理由は、一目惚れだと。彼女の精神は完全にサイコパス化しており、精神治療を受ける必要がある。なお、彼女の父親は暴走族だと判明、彼女の異常

な性格が家庭環境に原因があると思われる」

信一は聞き終えた瞬間、一瞬恐怖に襲われた。俺の妹に一日惚れだと！？ふざけた患者だな。

ふと、信一は全員の顔を見た。

「茜はどうした？」

いつの間にか、茜が居なくなっていた。

「そういえばいない」

「どこへ行つたのかしら？」

まさか……な……いや、もしかして

茜は田を覚ました。そこは、見知らぬ部屋だった。学校の教室くらいの広さはあつたが、天井には傷だらけのマネキンや人形がぶら下がつっていた。

「田、覚めた？」

茜はベッドに寝かされており、ベッドの横に、見知らぬ少女が座っていた。

肌は白く、髪は長く生えており、顔は少女らしい可愛らしさがあつた。声も幼い甘えん坊らしい声だつた。ただ、唯一おかしい所といえば、目が猫のように黄色だつた。ピンク色のワンピースを着ていた。

「ふふふ、実際に見ると可愛い子ね、うん」からかうような口調で言った。

茜は恐怖よりも不思議さを感じた。この少女から人間らしい生気が感じられなかつた。

「あなたは誰？」

「あたし？ そう……あなたはあたしを知らないのね。でも、あたしはあなたを知つてる」

「会つたこともないのに？」

「あいざわあかね、そがあなたの名前でしょ？」

茜は驚いた。と言つより喜んだ。

「す」「…よく知ってるね。私、病室からあまり出た」とないのに
「どうやって分かったの？」

「ふふふ、ひ・み・つ」

茜ははつと思いついた。

「私、どうしてここにいるの？」

「あたしが連れてきたの」

茜は驚いた。と言つより不思議に思つた。

「どうやつて？」

「あなただけ廊下にいたから、後ろから、睡眠薬を染み込ませたハ
ンカチを口につけて眠らせたの」

「睡眠薬？」

「眠れる薬のこと」

少女は、薬の入ったビンを見せた。

「そういえば、あなたの名前は？」

「亜矢子」

「苗字は？」

「教えたくない」

茜は首を傾げた。「なんで？」

「だって、苗字を馬鹿にされたことあるから」

「私は馬鹿にしない」

「本当に？」

「うん」

「約束する？」

「うん」

「あたしの苗字は鬼塚」

「おにつか？どこがおかしいの？」

「鬼塚の鬼は、桃太郎に出てくる鬼と同じだって言われた」

「血から強そうでいいじゃん」

「亜矢子はくすくす笑つた。

「やっぱり、思つたとおりの性格ね」

「何が？」

その瞬間、マネキンのひとつが動いた。

「ちょっと黙らせてくる」

亜矢子は鋏はさみを持って、マネキンの所へ行つた。茜は動いたマネキンを良く見た。その時は、冗談抜きで驚いた。動いたのはマネキンではなく、裸の若い女性だった。女性は、両手を縄で縛り付けられていて、宙吊り状態だった。全身に沢山切り傷があり、どれも痛々しいものだ。

他にも3人、若い女性が両腕を縛られ、宙吊り状態になつていた。

「その人たちは？」

「あたしをいじめてた看護婦。ちょっと懲らしめるの」

亜矢子は、鋏で、若い女性の右乳首を切り落とした。女性は、絶叫を上げた。だが、口をガムテープで塞がれていため、声はあまり出なかつた。

茜は自分の右胸を両腕で抑えた。「なんで看護婦さんをいじめるの？」

「あたしをいじめた仕返し。正直見てて気持ちいいのよね」

亜矢子は、鋏で椅子に縛られている看護婦の喉に突きつけた。

「やめて！！」茜は思わず叫んだ。

亜矢子は不思議そうに茜を見た。亜矢子にとつて、殺しを静止させた茜がおかしくて仕方がないのだろう。「なぜ？赤の他人でしょう？」

？」

「でも、でも、人殺しは良くない、と思う」

「あのね、今は人々が次々と殺人鬼に変貌してるので。この人達だってそうなるかも。そうなる前に殺す、いわゆる、正当防衛つて奴よ」「せいとうぼうえい？」

「相手が殺しに掛かつて来る時、自分の身を守るために殺すことよ」
亜矢子は、鋏の刃で、椅子に縛り付けている看護婦の首を切り裂いた。首の皮が引き裂かれ、筋肉が露出した。

「ううん、まだまだね」

亜矢子は深く首を切り裂いた。首から大量の血が噴出した。

茜は吐き気に襲われた。動脈を切られた看護婦は約3秒で意識がなくなつた。

「人の体は不便よね。動脈を切つたら3秒で意識がなくなるんだから」

亜矢子は、水道に行き、鍼に付いた血を洗い流した。

そして、茜の方向を見た。

「あかねちゃん、一緒に遊ぼっ。おもちゃで遊ぶ？」

茜は顔を覆い隠しながら聞いた。「おもちゃ？」

「看護婦のことよ」

茜は怒りと恐怖に支配された。「人をおもちゃにするなんて！ あなたは、えつと、魔魔よ！」

亜矢子は微笑んだ。「お父さんが言つてたよ。人間の本質は魔魔と変わりないって」

そして、鍼を力一杯握つた。

「なら、鬼ごっこしよう。あたしが鬼ね」

亜矢子は目を瞑つた。

「い、い、い、さー」

茜は危機感を感じてベッドから立ち上がりうとした。だが、長い間ベッドの上で寝ていたため、歩く感覚を忘れていた。茜は立つこと出来ず、床を這いずりながら出口を手指した。

「よーん、ごーお、30秒数えるよ？」

茜は手を思いつきり伸ばし、ドアノブを捻つてドアを開けた。ドアを開けた先には、学校の理科室のような風景が広がっていた。沢山の縦長テーブルが並んでおり、テーブルの上には薬品が入った試験管がずらりと並んでいた。

「にじゅう！ にじゅういち！ にじゅう二！」

茜は残り時間で部屋から出ることは不可能と判断し、近くのテーブルの下に隠れた。

「30！ もういいかい？」

答えたらいひから位置を悟られるため、答えなかつた。

「じゃあ、いくよ」

茜は両手で口を塞いだ。足音が近づいてくる。

「あかねちゃん、どこ?」

鍵の音が聞こえた。

足音が止まつた。

神様お願いします、どうか見つかりませんように。茜は心の底から願つた。

亜矢子は再び歩き始めた。

ほつと安心した

そして、理科室の扉が開き、亜矢子が出て行くのを確認した。

茜は、テープルから出た。

そして、亜矢子が出た出口から廊下に出た。

廊下は暗く、狭かつた。

茜は座り込んだ。

早くお兄ちゃん来ないかな? それにしても、この病院は怖いわね。

茜は、廊下の奥から来た。

「あやかちゃんじゃない人じゃないかな?」

そう願つた瞬間、聞き覚えのある音が聞こえた。

何か、硬くて重いものを引きずる音が、廊下の奥からする。

茜は音のする方向を向いた。

音の主が、姿を現した。

妨害者だった。感染者との交戦を逃れ、はるばるこの階に来たのだ。

つるはしを持つて……

妨害者はつるはしを引きずりながら、茜に近づいた。ドアを閉め、鍵を掛けた。

そして、亜矢子と出会つた部屋の戻つた。

ここでのドアも閉め、鍵を掛けた。

そして、ベッドの下に隠れた。

理科室のドアが壊れるの音を聞いた。

その数十秒後、亜矢子の部屋の扉が壊れ始めた。

神様！仏様！天使様！お兄ちゃん！助けて！

ドアが壊れた。茜は口を塞いだ。

妨害者は室内に入った。

茜の隠れてるベッドを素通りし、宙吊りの看護婦に近づいた。

看護婦達は、悲鳴を上げた。妨害者は、つるはしで、看護婦の1人の腹を刺し、引き裂いた。胃や腸が露出し、大きく裂けた腹から垂れ落ちた。

妨害者は、2人目に近づいた。今度は背骨を碎いた。

3人目は、滅茶苦茶に刺した。

茜は見てないが、音を聞くだけで吐き気に襲われた。

音が止んだ。

もう行つたのかな？

そう思つた瞬間、妨害者が、ベッドの下を覗き込んだ。

茜は思わず悲鳴を上げた。

妨害者は、腕を伸ばしてきた。

茜は奥に詰めたが、とうとう、妨害者に腕をつかまれた。

そして、引っ張り出された。

茜は、短い人生の終わりを悟つた。

亜矢子（後書き）

【追加登場人物】

鬼塚亜矢子

おにづかあやこ

職員から問題視されていた少女。

性格は残酷かつ攻撃的。

精神異常

サイコパ

者であつて、^ス発狂者^{クレイジーズ}ではない。

真紅計画第3段階（前書き）

【追加登場人物】

石倉洋

陸上自衛隊員。まじめで信頼されている。階級は准陸尉。

永田健勝

陸上自衛隊員。自由とサッカーを愛する男。階級は陸曹長。

矢倍代音

陸上自衛隊員。不幸な男。階級は2等陸曹。

尾崎六祖

陸上自衛隊員。平和を愛し、戦争を嫌う。階級は1等陸曹。

「総員戦闘準備」

石倉は89式小銃の点検をした。装甲弾使用12・7mm重機関銃M2を搭載した軽装甲機動車の後部座席に乗っていた。運転は永田が担当し、助手席には尾崎が座っていた。銃器担当は矢倍が担当した。

石倉達が乗っている機動車は車両隊の先頭に立ち、後ろには8台の新型73式大型トラックが、隊員を乗せて走っていた。上空にはブラックホークが2機、隊員を乗せ、飛んでいた。

「なあ、永田、お前サッカーが好きなんだろ?」

尾崎は銃の点検をしながら質問した。

「そうさ、これからサッカーはなでしこジャパンの時代だ」永田は興奮気味の声で言った。

「なでしこジャパン? 何それ?」

「知らないのか? うれたな、女子サッカーチームだよ!」

「俺はサッカーに興味がない」

「今からでも遅くはない。なでしこについて教えてやる」

「いいよ、面倒だ」

「遠慮するな」

永田はなでしこについて、情熱的に語り始めた。

石倉は、あまりにも永田の声がうるさく感じた。

「永田、少し静かにしろ」

「いいじゃないですか? こいつのサッカーの考え方を変えてやつても」

再び情熱的に語った。

本当にサッカーについてはうるさい奴だ。六祖も何でさつカーにつ

いて質問したんだ？やりきれないな。

石倉はイヤホンを耳に付け、音楽を流し始めた。

「やっぱり、『ゼロの調律』はいいな」不意につぶやいた。

矢倍が大声で怒鳴った。

「隊長！一本道の入ります！」

だが、石倉は大音量で音楽を流していたため、聞こえなかつた。

「隊長！返事してください！」

六祖はイヤホンをはずした。

「隊長、一本道に入ります」

石倉はやつと話しかけられていたことに気づいた。

「分かつた六祖、矢倍、警戒を怠るな」

石倉は音楽を止め、89式小銃をしっかりと握つた。

無線機から、存在感のある声が流れた。

「現地派遣部隊に告ぐ、真紅計画^{マーレ・シナジー}第3段階に入る」

石倉は返信ボタンを押した。

「了解、第3段階の詳細を教えてください」

「感染者の殲滅だ。実弾使用の許可を出す。現場指揮は石倉、お前に任せる」

「了解、任せてください」

石倉は現場責任者として送られた。この作戦における責任は重要だ。さつきははつきりと任せろと言つたが、石倉は複雑な気持ちだつた。感染拡大を防ぐために、感染者を殲滅するため、部隊が派遣されたが、感染者を殺害することは、市民を殺害するのと同じだ。まして、人殺しなどしたことのない隊員が突然ここに送られたのだから、皆不安を感じているだろう。しかも、詳しい情報は与えられず、一体何の感染かさえも分からぬ隊員が大半を占めている。ただ、ガスマスクを渡され、感染者には噛まれるなどしか言われていない。

「隊長、一体何の感染ですか？」

矢倍は、周囲を見渡しながら質問した。

「狂犬病に似た感染が広まっていると」

永田は笑った。「狂犬病ならぬ狂人病か」

「まあ、そんなところだ」

尾崎は地図を確認していた。

「このまま500m走ると、広い道路に出ます」

尾崎の言つたとおり、500m走つていると、広い道路に出た。

石倉は、無線機で現地派遣部隊全員に連絡した。

「広い道路に出た。気を引き締めろ」

しばらく走つていると、突然永田がブレーキを掛けた。

「どうした！ 永田！」

「前に障害物がある」

永田の言つとおり、燃えた車が何台もあり、道路を封鎖していた。

「どういうことだ？」

石倉は、疑問に思つた。

「総員に通達、戦闘態勢入れ」

そう言つた数秒後トランクから大勢の自衛隊員が降り、車両を囲むようにそれぞの配置についた。

矢倍を残して、石倉達も降りた。

「隊長！ 前方から大勢の市民がこちらに走つてくる！」

1人の陸自隊員が叫んだ。確かに前方から大勢の市民が走つてくる。

石倉が不審に重い、双眼鏡で覗いた。

市民達の目の色は赤かつた。

あれが感染者か

「総員射撃準備！」 石倉は怒鳴つた。

それを聞いた全自衛隊員が銃を構えた。全員、深呼吸をした。

『こちらブラックホール1号、隊員を降ろす』

ブラックホール2機の扉が開いた。そして、ロープが降りた。

『行け、行け、行け』

隊員が1人ずつロープで降り始めた。

1号機が最後の一人を降ろそうとした瞬間、近くにあつたビルの屋上から、サラリーマンの格好をした男性が、降りようとした隊員に飛び掛った。

男性は、信じられない飛距離で隊員に抱きついた。

「くそ！やばい！」

隊員はロープから手を離してしまった。そのまま、落ちた。

「くそ！一人負傷した！」石倉は怒鳴りながら、落下した隊員の所に向かつた。

隊員の横には、頭が潰れたサラリーマンが倒れていた。

「くそ、動いてない、衛生要員！！」石倉は怒鳴った。

左腕に赤十字標章を付けた隊員が駆け寄つた。

「どうしましたか！？」

「負傷した！！」

「殴られたんですか！？」

「いや、落ちた」

「何ですって！？」

「へりから落っこちた！！」

衛生要員は、耳を負傷した隊員に口元に近づけた。

「虫の息だ！早く治療しないと、取り返しの付かないことになるー。」

石倉は叫んだ。「担架だ！担架を持って来い！」

2人の隊員が担架を持ってきた。

「こいつを車両に乗せろ！」

隊員は負傷した隊員を担架に乗せ、急いでトラックに向かつた。

「隊長！市民が近づいてます！」

もはや、感染者達は目の色が確認できるくらい近くまで来ていた。

「車体や壁にしろ！」

そう叫んだ。

「撃ち方用意！！」

隊員達は銃を構えた。

「撃ち方始め！！」

そう言つた瞬間、一斉に銃声が鳴り響いた。

89式小銃は命中精度ではアメリカ軍正式採用銃のM16には負け
るが、反動面ではM16より軽い。

非常に撃ちやすい銃だ。その銃で自衛隊員たちは、1発もはずさ
となく、弾丸を次々と感染者に当てる。

「隊長！撃つていいですか！」

矢倍は叫んだ。

「ありつたけの弾丸を撃ち込め！」

そう叫んだ瞬間、50口径の機関銃が火を噴いた。装甲弾は元々、
車体に穴を開けるための弾であり、対人用ではない。そんな弾丸に
撃たれた感染者は、瞬時に固体から液体に変わった。

石倉は撃ちまくっていたが、弾丸が切れた。その時、鎌が飛んでき
た。

石倉は軽装甲機動車の後ろに隠れ、鎌を避けた。そして、装填した。
よく見ると、見知らぬ隊員が、震えながら隠れていた。

「お前！ここで何してる！」

隊員は震えた声で言つた。

「！」こんなのは、あ、あんまりだ・・・俺に人殺しは出来ない！

石倉は、フルオートに変えた。

「甘つたれるな！お前は人を殺したくないそудが、あつちはお前
を殺したがってるぞ！！」

「ど、どうして皆殺し合つんだよ？」

「死にたくないからだ！お前は死にたいか！」

「し、死にたくない・・・！」

「なら撃て！」

「撃ちたくない・・・」

石倉は舌打ちした。まったく、馬鹿な奴だ・・・

「なら、予備の弾丸を弾倉をよこせ！俺が変わりに撃つてやる！」

隊員は、赤子のように泣き始めた。

「人殺しなんかしたくない！俺は自衛隊員だ！軍隊じゃない！」

石倉は、我慢できず、隊員の左頬を殴つた。

「俺だつて人殺しはしたくない！だが、あっちが殺しに掛かるんだ！ここは戦場と変わらない！戦場では殺すか殺されるかだ！」

隊員は、泣くの止め、しつかりと歯を食いしばつた。

「よ、よし！やるぞ！」

そして、車体から出て、射撃を始めた。

石倉はそれを見て、満足した。

だが、感染者の数は、予想以上に多かつた。

『こちらブラックホーク、航空狙撃支援を開始します』
ブラックホークに乗つていた狙撃手が、狙撃を始めた。
石倉は、落下した自衛隊員が乗つてているトラックに向かつた。
トラックの後ろでは、尾崎が護衛のよう立つっていた。

「落下した奴の容態は！？」

衛生要員が報告した。

「最悪です、鎖骨、肋骨、腸骨、肩甲骨などを粉碎してゐる。瀕死の重症だ」

近くに通信機を背負つた隊員が居た。

「本部に報告！負傷者が出てる！至急増援と救助を要請！」

「了解！」

通信隊員が通信しようとした瞬間、右脚に鎌が刺さつた。

「あー！ぐそつたれ！いてえー！！！」

石倉は通信隊員を引きずつて、通信機を取つた。

「HQ（本部）！HQ（本部）！」

『こちら本部』

「こちら現地派遣部隊！2名の負傷者が出来た！感染者と交戦中！感染者の数が予想をはるかに上回つてゐる！弾薬が持たない！至急、増援と救助を要請する！」

一瞬、沈黙が続いた。

『増援は出せない、現状勢力で対処せよ』

「現状勢力だけでは持たないと言つたろ！！」

『繰り返す、増援は出せない』

「救助は！？」

『救助は検討中だ。今しばらく待て』

通信が切れた。

くそ！命令してるだけのお偉いさんが！！
よく見れば、感染者に囲まれていた。

石倉はMK2破片手榴弾を出し、ピンを抜いた。
そして、前方に投げた。

「手榴弾行つたぞ！！」

隊員達が、身を隠した。

手榴弾の中の火薬が発火し、爆発が起きた。爆発で大勢の感染者が死ぬか、重症を負った。破片が飛び散り、鉄の破片が、感染者の喉などを引き裂いた。

石倉は、自分が乗つっていた軽装甲機動車に向かつて走つた。
中から、あるものを取り出そうとした。

その時、斧を持つた感染者が走つてきた。

石倉は機動車の後部座席に乗り、ドアを閉めた。感染者は扉を斧で叩いたが、防弾性の車体のため、斧が折れた。

永田が感染者を射殺した。

石倉は、後部座席の自分のバッグから小さなものを取つた。

傷痍手榴弾だ。

傷痍手榴弾を前方に投げた。

手榴弾が爆発し、あたりの道路は火の海と化した。

感染者達は、前方を通れなくなつた。通ろうとすれば、全身が瞬時に燃え盛るからだ。

「隊長！本部から応答です！」

尾崎は叫んだ。石倉は、尾崎のところへ行き、通信機を取つた。

「どうぞ」

『「こちら本部、救助は出せない。負傷者をブラックホークに乗せ、近くの基地まで戻れ』

「本気ですか！？」

『負傷者のみの撤退だ。無傷のものは現地で感染者を殲滅せよ』
「弾薬が足りないんだ！」

『これは命令だ。以上』

通信が切れた。

「どいつもこいつも！これだからお偉いさんは嫌いだ！！！」

『信一は無線機でブラックホークの操縦士と交信した。

「ブラックホーク1号機、応答せよ」

『こちらブラックホーク1号機』

『負傷者を乗せ、近くの基地まで飛べ』

『了解、だが、着陸地点がない』

確かに、地上では感染者に襲われる可能性がある。近くの建物の屋上は、ブラックホークを着陸できる広さがない。
どうすれば……

すると、遠くの高層ビルが見えた。屋上もかなり広そうだ。距離も800mくらいか……

『800m先の高層ビルの屋上で待機してろ！』

『了解、待つている』

ブラックホーク1号機が高層ビルに向かつて飛んでいった。

『全員トラックに乗れ！！800m先の高層ビルに向かう！』

それを聞いた隊員達は一斉にトラックに乗り始めた。
石倉達も、軽装甲機動車に乗った。

『永田！飛ばせ！！』

機動車が走ると同時に、後ろのトラックも走り始めた。

精神発狂者 対 精神病質者

茜は、妨害者にベッドから引きずり出された。

妨害者は足で、茜を逃げないように抑えた。

そして、つるはしを振り上げた。

茜は、走馬灯のように短い自分の人生を振り返っていた。

人生の大半が、入院生活。

友人は居なく、話し相手はお見舞いに来る信一と、看護婦だけ。まさに、孤独な人生だった。

人生の最後も、孤独に終わるのか・・・・。

妨害者は、奇声を上げながら、今にもつるはしを振り落としそうだった。

茜は目を閉じた。これが運命なら、素直に受け入れよう。

そして、目を瞑つた。

その時、突然妨害者が苦痛を表す奇声を発した。

「何が起きたの……？」

茜は目を開けた。

亜矢子が、鍼で妨害者の左腹部を刺していた。

「あたしとあかねちゃんの遊びの邪魔をしないで」

そして、鍼を抜いた。

妨害者は倒れこんだ。

「大丈夫、あかねちゃん？」

亜矢子は、左腕を差し出した。

武器を向けたり、首を絞めたりするのではなく、ただ、差し出した。茜は素直に受け取った。

亜矢子は、茜を立ち上がらせて、ベッドに座らせた。

「あの、どうして私を助けたの？」

亜矢子は微笑みを見せた。

「助けておかしい？」

「だつて、私を殺そうとしたじゃん」

亜矢子は首を傾げた。

「殺そうとした？ いつ？ あたし、ただ、あかねちゃんと遊びたかつただけだけど」

なんてこと… 完全に思い違いだった。まさか、本当にただ、遊びたかつただけなんて…

「ね、次何して うぐつ！」

亜矢子が言い終える前に、突然うめき声を上げた。

妨害者が、後ろから亜矢子の首を左腕で絞めた。鍔を持った亜矢子の右腕は、右手で掴んで抑えた。

亜矢子は、左手で妨害者の腕を放そうとしたが、腕力では敵わなかつた。

妨害者は奇声を発しながら、腕に力を入れた。

亜矢子は苦しみのうめき声を発した。

茜はベッドから降りた。そして、這いずつた。

亜矢子は、右手の鍔を落とした。

まさか、腹を刺されて平然とする奴が居たなんて…
意識が薄れ始めた。

突然、妨害者が力を緩めた。

茜が、鍔で妨害者の左腿を刺したのだ。

妨害者は、亜矢子を放し、左腿に刺さった鍔を抜き、捨てた。

亜矢子は鍔を拾つた。

妨害者はつるはしを拾い上げた。

そして、亜矢子に向いた。

亜矢子は鍔をしっかりと握つた。

亜矢子と妨害者の対決。

サイロバス

それはまさに、精神病質者サイロバスと発狂者クレイジーズの対決だった。

両者とも、殺人鬼だ。殺意を敵に向けた。

妨害者は、つるはしを亜矢子の頭めがけて横に振った。

亜矢子はしゃがみ、妨害者の攻撃を避け、右腕の鍔でまた腹部を刺そうとした。

妨害者は、左腕で亜矢子の腕を掴み、それを防いだ。そして、右手のつるはしを構えた。

亜矢子は左腕で、妨害者の股間を殴った。

妨害者は情けない声を上げて怯んだ。

すかさず、亜矢子は右手に力を入れた。。

鍔は妨害者の腹に刺さった。

妨害者は、奇声を発しながら、両膝を床に着いた。

亜矢子は立ち上がった。

そして、鍔を妨害者の首に刺した。

妨害者は、絶叫を上げながら、倒れこんだ。

「もう大丈夫よ」

亜矢子は、殺意のない、優しそうな微笑を見せた。

茜は、亜矢子が本当に子供なのか疑問を持つた。

言動こそはいいが、行動と戦闘は、およそ子供らしくない。

「どうしたの？」

「なんでもない」

茜はそう言った。本当は吐き気がして居るが、この際嘘を言ったほうがいいと思った。

「じゃあ、散歩に行こうよ」

茜は、耳を疑つた。散歩？遊びの次は散歩？

亜矢子は車椅子を持ってきた。

そして、茜を座らせた。

「じゃあ、外に行こう」

亜矢子は車椅子を押した。

はたして、この少女を信じていいのだろうか？

茜は悩んだ。少なくとも、今はまだ殺されないかも……

第3の発狂者

これまで、2人の発狂者^{クレイジーズ}が現れた。1人目は名無しの老婆であり、孫が感染したことで発狂した。2人目は妨害者と呼ばれる少年であり、病院内で目の入った人を殺していた。

どれも信一達の前に現れたが、実は別の場所でも発狂者^{クレイジーズ}は居た……

聖夜は、機嫌悪そうに学校を見回っていた。

たく、坂本（流星）の奴、こんな大変な状況だつてのに、あいつ、俺をまたヴァイオレンスパパと言つてからかいやがつて！－マジでむかつく！

そう思つて、近くのゴミ箱を倒した。

「やあ！」

後ろから誰かが話しかけた。

聖夜は思わず驚きの声を上げた。

真希が居た。

「んだよ、坂本か」

「驚いた？」

「い、いや」本当は驚いていたが、黙つてることにした。
女に驚かされたなんて、いい笑いものだぜ。

奥から、女性の声が聞こえる。

「誰だろ？」「

「まあ、行つてみるか」

2人は声のするほうに行つた。そこは、多目的室だった。

中には前髪が、目の上に綺麗に切れている、小柄の女子が居た。左頬は火傷の様な跡があり、肌は普通の女子に比べ、黒かった。

「あいつ、誰だ？」

「あの子は川原あゆみ。2年2組の女子」「よく分かるな」

「生徒会長ですから」

「2人は川原に近づいた。」

「川原さん、何してるの？」

「川原は、不気味な微笑みを見せた。」

「私は川原あゆみじゃない」

「じゃあ、誰だ？」

川原は、両腕を広げた。

「私は雷光を操る至高神ゼウスとアトランティスの支配者海の神ポセイドンに従える大天使ガブリエルよ」

2人は瞬時に悟った。この人は普通ではないと。

よく見ると、川原の足元には魔方陣が書かれている。

「えっと、ガブリエルさん、あなたは何をしているの？」

「無知で哀れな者達の魂を浄化し、救済するために地上に降り去ったのよ」

真希は、一度興味本位でギリシャ神話とキリスト教を勉強したことがある。ゼウスとポセイドンはギリシャ神話の神であり、ガブリエルはキリスト教の大天使の1人である。つまり、彼女はギリシャ神話とキリスト教を混ぜ合わせてるのだった。

「川…じゃなくてガブリエルさん、一日落ち着いてください」

川原は、ペンダントを見せ付けた。

「この聖なる水晶は悪なるものを見極める力がある」「どう見ても、ただのガラスの玉だつた。」

「大魔神サタンを打ち破りし熾天使ミカエルよ、旅人の守護天使ラファエルよ、私に力を与えたまえ」

聖夜は絶句していた。こいつは明らかに正気じゃない。異常だ。サタン？ミカエル？ラファエル？わけが分からない。

「おお！なんてこと！」

川原は、聖夜を指差した。

「あなたは墮天使の首領にして地獄の支配者サタンの化身か！」「

川原は、真希を指差した。

「あなたはアダムの最初の妻、妖艶な悪魔達の母リリスの娘か！」

は？

川原は顔を天井に向け、両手を天井に伸ばした。

「神罰の実行者ウリエルよ、全能の唯一神ヤハウェよ、私に悪魔を
撃ち滅ぼす力を与えてください」

聖夜と真希は呆れてどう反応すればいいが分からなかつた。

その時、川原は包丁を出した。

「サタンの化身！リリスの娘よ！そなた等を最強の墮天使ルシファ
ーを切り裂いた黄金の剣で滅ぼさん！」

それは本物の包丁だつた。

「よ、よせ！」

だが、川原は包丁で聖夜の首筋を切り裂こうとした。

聖夜は間一髪避けた。

この女は明らかに正気じゃない！

川原は、多目的室のドアの閉め、鍵を掛けた。

「主よ！邪悪な魔物達を聖地に閉じ込めました！」

この女は明らかに役なりきつている！

川原は、包丁で真希の腹を突き刺そうとした。

真希は、両腕で刃を受け止めた。

「危なっ！」

真希は刃を放さなかつた。

「くつ馬鹿な！黄金の剣が止められるなんて！」

川原は力一杯包丁を押した。

包丁が段々真希の腹に近づいていく。

「や、やば！」

真希は生命の危機を感じた。

聖夜は、川原の腹を力一杯殴つた。

「ぐぐつーおのれー汚らわしい悪魔めーー！」

真希は包丁を振った。

聖夜は今度は軽々と避けた。

川原は真希の腹を再び刺そうとしたが、真希は空手の下段払いを払つた。包丁は、川原の腕から滑り落ちた。

「私、実は空手の黒帯なんだ」

川原は悔しそうな顔をした。「おおー神よー私に悪魔に勝る力をー！」

真希は川原の顔を思いつきり殴つた。黒帯のパンチの威力はすさまじく、川原は気絶した。

「ふう、これで一安心」

真希は手でほこりをはらつた。

2人はガムテープで川原を縛つた。

それにもしても、こいつはほんとに正気か？ゼウスだの、ポセイドンだの、ガブリエルだの、サタンだの、ミカエルだの、ラファエルだの、ウリエルだの、ヤハウエだの、ルシファーだの、訳の分からない用語だの、本当に気持ち悪い女だつたな……

「こいつは何だつたのか？」

真希は考え込んだ。

「たぶん、発狂したんじゃない？」

発狂：つまりきちがいになつたのか！
この女は発狂者になつたのか？
この女は発狂者になつたのか？
この女は発狂者になつたのか？

感染者だけで厄介なのに、発狂者まで現れたら、もっと厄介だな。

真人達が居なくなつたが、無事だらうか？

2人は、川原を置いて、教室に出た。

第3の発狂者（後書き）

【追加登場人物】

川原あゆみ

学校内に現れた発狂者^{クレイジーズ}。

自信を大天使ガブリエルと名乗り、

聖夜達

を悪魔と呼び、黄金の剣一（ただの包丁）で殺そうとした。

信一、真人、立花の3人は、茜の行方を探していた。信一は不安になっていた。推測に過ぎないが、茜を連れ去ったのは恐らく、鬼塚亜矢子だろう。だが、この階は全て調べつくした。

「他の階に居るのかしら？」

「1階はまずないな。感染者だらけだからな」

そう言えば、妨害者はどうなったんだろう？あの数の感染者相手に無事のはずがない。

信一達は、再びエレベーター付近の待機室に着いた。

「次はどの階を探索する？」真人は信一に聞いた。

どの階と言われてもな。

信一はちらりとモニターを見た。その時信一は絶句した。

1階のホールは感染者に埋め尽くされていた。

1階は完全に無理だな……まったく、茜はどこだ？

立花が近くのドアを開けてみた。

「信一君、来て」

信一と真人は立花の所に向かった。

立花が、部屋の中のある場所に懐中電灯を照らしていた。そこには、天井に丸いマンホールほどの穴が開いてあり、ロープがぶら下がっていた。

「相沢、お前の考えを言つてみようか？」

「頼む」

「ロープに上つてみよ」

「残念、正解は茜を探そう」

信一はロープで上がつてみた。

部屋の上は、理科室のような空間が広がっていた。2つの扉が部屋の前と後ろにあった。

2人も上がりつて来た。

「驚いたな」

「ええ…」

信一は、前の中学校の理科室を思い出した。あの『化け物』との初交戦だつたな。

信一は1つに扉に向かつた。

扉はすでに壊れていた。

中は、傷だらけのマネキンが多くぶら下がつてゐる部屋だつたが、よく見ると、裸の女性の死体もぶら下がつてゐた。どれも無残だつた……

床には大量の血が広まつており、血だらけの鍔が落ちていた。よく見ると、何かが引きずつた後があつた。

信一は、前の出来事があつてか、吐き気はしなかつた。

立花は吐き気に襲われた。

真人は吐き気……ではなく吐いた。

「IJの部屋から出よ」

信一達は駆け足で出て行つた。

もう1つの扉に向かつた。こちらも壊れていた。出てみると、狭い暗い廊下が奥まで広まつていた。

信一は暗い所に飽き飽きしていた。

「まあ、まつすぐ進んでみよう」

信一達は進んだ。

茜は亜矢子と共に屋上に居た。屋上は青空が広まつてゐた。

「ねえ、次は何して遊ぶ?」亜矢子は茜に尋ねた。

茜は、出来るだけ亜矢子を怒らせない遊びを考えた。

「かくれんぼ」

亜矢子は首を振つた。「さつきやつたじやない

茜は再び考え込んだ。確かにさつきやつた。殺人系は出来るだけ遠ざけよう。

「じゃあ、おままで」と

亜矢子は力のない笑みを見せた。

「あたしはやつたことないから」

亜矢子はあつと言つた。

「じゃあ、拷問じつ！」

茜は首を傾げた。

「じつもん？」

「拷問とは、相手に肉体的苦痛を与え、無理矢理情報を聞き出すことである」

亜矢子はこ一寧に教えた。

「にくたいてきくつう？」

亜矢子は呆れた。

「肉体的苦痛とは、まあ、簡単に言えます」く痛いこと」

茜は血の気が引いた。

「わ、私は、あんまし人を傷つけたくない……」

茜は今の発言に後悔した。もしかしたら今の発言で怒りを買ったかもしれない。

だが、亜矢子の反応は茜の予想を反するものだつた。

「人を傷つけることや、殺すことが嫌いなの？」

「う、うん。でもあやこちゃんがやりたいなら……」

「じゃあやめる」

茜は驚いた。やめる？どうこうとかしら？

「やめるって？どうこう意味？」

「文字通りよ、人殺しも傷つけることもやめる」

また驚いた。

「どうしてやめるの？」

「だって、あかねちゃんは嫌いでしょ？」

「う、うん」

「だからやめる」

私が嫌いだからやめる？どうしてだろう？これは素直に喜ぶべきだ

ろうか？

「じゃあ、部屋に戻るうか？」

「う、うん」

亜矢子は車椅子を押そうとした。

その時、屋上の入り口である階段から、何か鉄のよつな物を引きずる音がした。

妨害者だった。

妨害者が、首に包帯を巻きながらやつてきた。愛用のつるはしを持つて…

残念な事に茜も亜矢子も丸腰だった。

「嘘でしょ…首を刺されて生きてるなんて…」

亜矢子は、初めて動搖を見せた。

妨害者は、悲鳴に思える奇声を発しながら、2人に近づいた。

再び、精神病質者サイコパスと発狂者クレイジーズが対峙した。

妨害者は奇声を発しながら、つるはしを構えた。

亜矢子は茜を守るよう立つた。

妨害者は奇声を発しながらつるはしを振り下ろした。

亜矢子は後ろに下がることで避けた。

つるはしはコンクリート製の床に突き刺さった。

亜矢子はこの隙に、茜の車椅子を引っ張つて入り口に向かった。

妨害者は左足で亜矢子の足を引っ掛けた。

亜矢子は転んでしまった。

茜の車椅子は出口とは違う方向に進み、フェンスにぶつかった。

妨害者は、亜矢子の腹部を思いつきり蹴つた。

亜矢子はうめき声を漏らした。妨害者は両腕で、亜矢子の両肩を掴み、無理矢理立たせた。

そして、今度は腹部に右拳で殴つた。そのまま右、左、右とフックを繰り出した。

だが、やられるばかりの亜矢子ではなかつた。

亜矢子は、右足で妨害者の男の急所を思いつきり蹴つた。

妨害者は情けない奇声を発した。

亜矢子は何度も男の急所を蹴りつけた。そのたびに妨害者は情けない奇声を発した。

妨害者が男の急所を抑えながら両膝をついた。

亜矢子は妨害者の横を通り過ぎて、つるはしを引っこ抜いた。

妨害者が振り向いた。

亜矢子は、妨害者の右脚目掛けてつるはしを振り下ろした。

「これで歩けないはず」

亜矢子はつるはしを放した。

だが、妨害者はつるはしを抜いた。

そして、普通にあるいた。普通に。

「嘘！」

妨害者は、つるはしで亜矢子の右脚を突き刺した。亜矢子の右脚の骨が砕けた。

亜矢子は苦痛のあまり、声も出せずに倒れこんだ。

今度は、右手を刺した。

次は右肩。

さすがに亜矢子も抵抗が出来なかつた。

そして、頭を刺そうとした。

茜は車椅子を走らせて、妨害者に体当たりした。

妨害者は、ぶつかつた衝撃で車椅子に座つていてる茜の腿の上に座つてしまつた。

茜はすかさずフェンスに向かつて走つた。

車椅子はフェンスにぶつかつた。

妨害者は、車椅子から離れるため、フェンスに上がつた。

茜はそれを狙つていた。茜は妨害者を押し上げた。

妨害者はフェンスを越え、そのまま落下した。

屋上は7階の高さがあつた。

妨害者は、地面にぶつかつた。

病院からの脱出（前書き）

【病院内に居た人物】

相沢信二

安藤真人

立花裕香

相沢茜

鬼塚亜矢子

妨害者

【死亡者】

妨害者

死因：転落死

【重傷者】

鬼塚亜矢子

病院からの脱出

信一は、屋上に駆け上がっていた。廊下の窓から誰かが屋上から落
下するのを見た。

「頼むから、茜じゃないように……」

信一は祈った。もし、茜が無事なら、俺はキリスト教に入信しよう。
屋上に着いた。

居た！ 茜がちゃんと居る！ だが、もう一人誰か居るな……

茜の車椅子を、少女が押していた。明らかに、その少女は重症だ。

信一は駆け寄った。

「大丈夫か！ 茜！」

「お兄ちゃん……」

茜は兄の再会を喜んだ。

「君も大丈夫か！？」

「……ええ……」息が荒かつた。

右肩、右手、右脚から、血が流れ出していた。

信一は、その少女を負ぶつた。

そして、茜の車椅子を押した。

「お兄ちゃん、私警察に捕まるかな？」

「どうして？」

「さつき、人を落としたの……」

「向こうは殺しに着たか？」

「うん」

「じゃあ、正当防衛だな」

信一達は、真人達と合流した。

「その子、大丈夫？」

「いや、息が荒い」

信一は、どこかで傷の治療をしようと思つた。

「ここは暗いから、他の場所にしよう」

茜は信一に向いた。

「なら、3階がいいと思う」

「なぜ？」

「薬も包帯もベッドもあるから」

信一は感心した。よく知ってるな。エレベーターに乗り、3階を押した。

立花は、信一に質問した。

「さつき落ちた人は？」

「妨害者だ」

「へ、いいまだ」

「それにも、よくぼ……きや！」

立花は悲鳴を上げた。エレベーターはすでに指定の階に着いていたが、開いたドアから自衛隊員が89式小銃を構えていた。ガスマスクをしていて、表情が伺えない。

「噉まれた奴は居るか？」

自衛隊員は、呼吸音交じりの声で聞いた。

「いいえ、でも重症の奴は居る」

自衛隊員はしばらく銃を構えていた。

「分かった、降りて来い」

自衛隊員は信一達を薬品室に連れて來た。

「俺の名前は織部直樹。陸自の狙撃手だ」

薬品室の端にベッドが置かれていた。

「負傷者をそこに寝かせろ」

信一は少女をベッドに寝かせた。

「幸い、ここには色々な薬品がある。麻酔や解毒剤などがある。モルヒネもな」

信一は、モルヒネが何の薬品か分からなかつた。

「あいつに鎮痛剤を打つてやれ」

直人は注射器を信一に投げてきた。

「あの……俺は注射のやり方が分かりません」

「悪かった。俺が打つ」

信一は鎮痛剤を直人に渡した。

直人は鎮痛剤を少女に打つた。ある程度の医療技術はあるようだな。
「注射できるんですね」

「当たり前だ。俺は衛生要員を自指してたんだ。けど、いちいち薬品の名前を覚えられないし、心臓マッサージをやろうとすると力を入れすぎて肋骨を折うかもしれないし、だからやめた」
軽い口調から嘘っぽいが本当かもしれない…

「あの、そのガスマスクはあまり意味ありません」

直人は信一に向いた。

「なぜ分かる？」

「ウイルスは接触感染型です。空気感染はしません」

「はははん、さては、あの事件の生還者だな？」

「はい」

「やつぱりな。どつかで見た顔だなと思ったよ。俺も現場に居たんだ」

直人はガスマスクをはずした。

「でも、経口感染は防げるかもしません」

「いいや、ガスマスクは息苦しいし、視野も狭くなるからお荷物だ」

直人は、シップを少女の傷口部分に着け、包帯を巻いた。

「ここにある薬品は持てるだけ持て」

直人は、大きなリュックを3人に渡した。3人は薬品を詰め始めた。
信一はてっきり自衛隊員は全員撤退したとばかり思った。

「撤退しなかつたんですか？」

「ああ。他の奴は撤退した」

直人は銃の点検をした。よく見ると、狙撃銃を背負っていた。

狙撃手… そういえば、俺の兄さんも狙撃手だったな… 妙な偶然だな。

「荷物をまとめろ。すぐにここを出る」

直人は直人を睨み付けた。

「出るつて、1階は感染者だらけですよ？」

「俺はロープを持っている。ロープで窓から降りるんだ」

「あそこは駄目だ。俺は非常階段から侵入したが、後から大勢の感

染者がやってきてな」

信一は別に驚きもしなかった。前にもあつたことだ。

「おい、信一君。少女を背負つてくれ。その女子は車椅子を押して。ナタを持ったお前は1番後ろだ」

直人は銃を構えながら、薬品室を出た。信一達は、その後ろを付いた。

直人は、廊下の窓を開けた。そして、ロープを下げ、窓の反対にある柱に結び付けた。

「俺が先に下りて下の安全を確保する」

信一は質問した。「待つてくれ、この少女とあ、車椅子はどうすればいい?」

「ロープは後2つある。2人を背負つて自分の体と結び付ける。車椅子は、そうだな、最後の奴が一旦ロープを上げて結びつけて、下に下ろせ」

直人はそう言つて、ロープで降りた。

信一と真人と立花は無言でじやんけんした。信一が1番目に勝ち、立花が2番目、真人は負けた。

「じゃあ、俺は茜、安藤は少女を頼む」

「分かった」

信一と真人は茜と少女を背負つて、ロープで落ちないようにした。

「よし、俺が先に行く」

信一はロープでゆっくりと降りた。

続けて立花も。

真人はロープを一旦上げ、車椅子を結びつけゆっくり下ろした。

「よし、お前も降りて来い」

真人は降りた。

案外簡単に脱出できたな。

信一は近くに停車している車を見た。車のガラスは全て割れており、屋根が少し凹んでいた。

「何かが落ちたのか？」

茜は驚いた。

「嘘、彼はここに落ちたはずよ

「彼？」

「ぼうがいしゃ」

信一は驚いた。6階の高さから落ちて生きてるのか？
驚いてるもつかの間、窓が割れる音がした。

病院内の感染者が窓を割つて続々と外に出た。

「くそ！まずい！逃げろ！」

直人が言つたと同時に、信一達は走つた。茜は立花に車椅子を押してもらつた。

感染者は奇声を発しながら信一達を追つた。

直人は振り返り、89式小銃を単発で4発撃つた。4人の感染者が撃ち殺されたが、まだ大勢居る。

近くにワゴン車があつた。しかもドアが開いて。

「ワゴンに乗れ！」

直人は怒鳴つた。信一は助手席、残りは後部座席に乗り、ドアを閉めた。さすがに車椅子は捨てた。直人は運転席に座り、鍵を探した。

「鍵がない！！」

感染者達はワゴン車を囲み、ガラスを叩き始めた。

「仕方ない！！」

直人はカバーをはずし、中のコードを引きちぎり、ショートさせようとした。

映画であるようなシーンだ。

車のエンジンが掛かつた。

「シートベルト着用！」

直人はベルトを着用した。

「3、2、1発車！！」

車が走り出した。直人は次々と感染者を跳ね飛ばした。

これも映画でよくあるシーンだ。

「安全な場所を知ってるか」

「はい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1037x/>

感染者の沈黙

2011年10月18日21時55分発行